

崎門学報

第十三号

平成 30 年 9 月 1 日

崎門学研究会



一面 保建大記現代語訳②
十一面 尾張藩の尊皇思想①
十四面 維新の源流を繙く②
十七面 平泉澄の歴史観
十九面 強齋先生大学講義④
二十面 活動報告
二十三面 種子法要望書

『保建大記』現代語訳 (其の二)

京師流言す。上皇、兵を東三條殿に集むと。帝は下野守源義朝をして少監物藤原光貞等を東三條に收め、之を鞠せしむ。

京都で崇徳上皇が兵を東三條殿（上皇の御所）に集め合戦の用意をしているとの風説が流れた。そこで後白河天皇は、下野守源頼朝に命じて東三條殿の留守をしていた少監物（官庁の出納を監察する役職）藤原光貞を捕えて訊問せしめた。

甲辰、上皇の兵を召すを以て、道路騒擾す。義朝及び檢非違使源義康に敕して禁内を警衛せしめ、檢非違使平基盛・源季實・平維繁・平實俊・藤原資經を近畿の諸路に遣はし、兵士の甲を齎して京師に入る者を捕ふ。乙巳、基盛、源親治を宇治路に獲て、之を西獄に繋ぐ。

七月五日、上皇兵を召されたことで京中騒

擾した。天皇は義朝と檢非違使の源義康に勅して内裏を守護せしめ、檢非違使平基盛、源季実、平維繁、平実俊、藤原資經を近畿の諸路に遣し、武具を持つて入京する者を上皇の味方と見て捕えた。七月六日、平基盛は、上皇の味方として宇治より上京した源親治と戦つてこれを捕え、京の西に置かれた獄舎に繋いだ。

臣愿曰く、王室の華蔓、一旦にして相聞ぐ。帝や院や、之を體し世を繼ぐ。皆我が天なる所なり。豈に義を舉げ亂を構へて、正偽相判るるが如くならんや。進止の義を審らかにし、向背の道を正さんと欲せば、即ち將た奚ぞ擇ばん。

臣愿が申し上げますに、本来花と蔓の様に仲睦まじいはずの御兄弟が一旦仲悪く争い給うた。天皇といつても上皇といつても皆天道を身に体し行い、天照大神の統を継ぎなされた天子であり、皆我々が天と仰ぎ崇めて、二つとないはずの主君である。どうしてシナの様に、此れは義兵を挙げた方なので正しい君だ、此れは乱を構えた方なので、たとえ天下を保つても偽主として仕えることはできない

い、などというように分別できるものではない。さすれば、専らどつちが義兵を挙げ、乱を構えたかはつきりしていれば、身の持ち方も決めやすいが、この様にどちらと同じ君の時は、出処進退の義理を明らかに立て向つて、敵味方の筋道を正しくしようと思うのである。ば、どの様に選んだものであろうか。

院は兄と雖も位を去ること久し。帝は弟と雖も當今の天子なり。馭萬年を踰えて未だ失徳あらず。院の兵を構ふ、其れ何の名ぞや。是の時に當りては、宜しく躬に三器を擁するを以て正とすべし。

上皇は兄であるが位を去つて年久しく、後白河は弟であるが、只今の天子は天下を治め給うて年を経るも、今だ失徳あるとの評判もない。しかるに上皇が兵を起して亡ぼそうとなされるのは、何の大義名分があるうか。所詮この時には、崇徳にもせよ、後白河にもせよ、直々に三種の神器を擁し給う御方が正統の天子であり、この方に向かつて仕え奉るべきである。

古昔は三器を通じて之を璽といふ。璽は信なり。皇祖璽を授け給ひし時、寶鏡を持して曰く、吾が兒、此れを視ること、當に猶ほ吾を視るがごとくなるべしと。又曰く、爾の祖を思ふことなかれ、吾れ鏡中に在りと。又曰く、八坂瓊の妙なるが如く、白銅鏡の明なるが

如く、且つ神劍を提げて天下を平げよと。神武は都を橿原に建て、三物を奉安し親祭懽るなし。以て祖先の神となし、以て天位の神となし、又以て己を修むるの具となし、又以て天下を馭するの器となし給ふ。崇神に至りて、別に鏡劍を模して護身の璽となし、世世相承けて之を改むることなし。

古は三種の神器を総称して璽と云つた。璽とは信の事である。天照大神、三種の神器を瓊瓊杵尊に授け給う時に、吾が兒此れを視ることまさに猶吾を視るがごとくすべし。また爾が祖を思うことなかれ、吾鏡中に在り、さらには八坂瓊の妙なるが如く、白銅鏡の明かなるが如く、且つは神劍瓊を提げて天下を平げよとの勅言を下された。

神武天皇は、日向の国より中つ国へ入り給ひ、元年辛酉の歳、橿原に都を建てなされ、三種の神器を奉安して親ら祭り給うこと聊も怠り給わなかつた。三種の神器を以つて先祖の神靈となし、また神器を以つて皇位の信となし、神器の徳を以つて己を修めるの具となし、天下を治める術となし給うたのである。

第十代崇神天皇に到つて、神代の靈器を同殿なさるることを畏れ給ひ、鏡劍を模作して御身の守りとなされ、代々承け継がれて今日まで変わることがない。（神鏡は現在伊勢の内宮に、宝劍は尾張の熱田神宮に座す）

天徳・長久の神鏡を火き、壽永の寶劍を失ふ

が如き、世變固より大にして、元暦、璽なくして位に即くに至りては、即ち其の變勝げて言ふべからず。當時藤原兼實は、區區の禍端を開くことを恐る。而も其の裔の良基は、臣を以て神璽となし、尊氏を寶劍となすの言あるに至る。

村上天皇の天徳四年、御朱雀天皇の長久元年、両度の火事によつて神鏡が焼け、壽永四年、壇ノ浦にて宝劍が失われた事などは、もとより甚だしい世のなり下りである。これは天威の畏るべき大變である。その後、後鳥羽天皇、三種の神器無くして位に即き給うたのは世變の大なる事、これに勝るものはない。当時の関白藤原兼實は、三種の神器なしに即位なさるということがあるものか。必ず万世までの禍の端を開くべし恐れたが、それも少々議論して、ぐずぐず言われたばかりで、朝廷に建白して諫奏したのではなかったのは、兼實の器量が足らなかつたからである。しかし、それでもまだ恐懼の心も有つたが、その末孫二条の関白良基に至ると後光厳天皇を位に即け奉る時、劍璽無くして如何なるものかと諸卿非難したのに対して、何が苦しかろう、良基を以つて神璽となされ、尊氏を以つて宝劍となされよと奏し、遂に帝位を定めてしまった。これはひとり恐懼の意無きのみならず、三種の神器を狎れ侮り、関白のもつとも言つてはならない言葉であり、言語道断である。

然りと雖も、護身の靈器は鎮宇の神物にして、萬世の公議たり。終に僞主眞を亂し、閏位正を蔑にすることを容さずんば、則ち世道夷なりと雖も、王風降ると雖も、而も三璽の尊は自若たり。

しかしながら、三種護身の靈験あらたかなる神器は天下古今を鎮め給う神物であり、天下万世まで公けの僉義をつめれば、どうしても終には無璽の君を僞主として眞の位を紛らかそうとしても人心が肯わぬ。差し当たつての閏統の天子の分では、たとえ幸に天下を取つてもなかなか正統の天子を蔑ろにすることは万民が許さない。さすれば、世道がいかに墮落しても、天皇の威風が成り下つても、三種の神器が尊いことはいつまでも同じである。

夫の秦の帝印を以て璽となし、漢の因て傳國の物となすが如きは、則ち周禮の璽節、左氏の璽書と固より異なることなし。而も秦に至り、惟だ天子のみ璽と稱して、臣下は稱することを得ざるのみ。吾が邦の百王授受、三種統一の道器と、年を同じうして語るべけんや。

昔、秦の始皇帝の時、帝の印判を以つて璽といった。その始皇帝の印判を漢が伝えて、秘藏して伝国璽といい、即位する時授受したのである。しかし始皇帝の璽も元はといえ、始皇が美玉を取り寄せ、丞相李斯に文字

を書かせ、細工人の孫壽と云う者に彫せた印である。したがつて、周礼にある璽節の様に、役人が関門で預かる印判割符や、春秋左氏伝にある魯の家老が捺した書類の印と同じであり、秦に到つて始皇帝が法を立て、天子の印ばかりを璽といつて、臣下はそういわないものである。どうしてこれを我が国百王今日まで受継ぎ給うた三種の神器と同列に論じられようか。

故に躬に三器を擁するを以て我が眞王とするに至りては、即ち臣、鬼神に要脅して疑なし。百世以て其の人を俟つて惑はざるなり。

以上の訳で、直々身に三種の神器を抱いておられるの方が本當の君であるということ、鬼神を証拠に立てても少しも疑いがなく、また百代後世までも合点のある人が出でたならば、いかにも至極の道理だと申されるだろう。

或は以爲らく、晋は蒯聵を納れ、孔子は衛を爲けずと。院、固より罪を父に得、帝も亦弟を以て兄を拒ぐ。唯だ院のみ與すべからざるにあらず、帝も亦従ふべからざるなりと。

ある人が疑いを抱いた。衛の靈公の子蒯聵は父（靈公）に罪を得て晋の国へ落ちのびたが、蒯聵の子の輒は国に留まつた。その後、靈公が死去した時、輒が嫡孫として国を領し

た。この時、晋の国から蒯聵も押し入れて衛の国を取ろうとしたのを輒が防いで戦つた。さてこの時、孔子は衛にいたので（国璽のある）輒を助けるべきかと問われたのに対して、殊の他、兄弟で国を譲り合つた伯夷叔齊を称美されたので。輒を助ける意思がないことが知れた。そこでこの度のことも、これによく似ており崇徳天皇は父鳥羽天皇に罪を得、後白河天皇は、弟でありながら兄（崇徳）を防いだのであるから、三種の神器が後白河にあるからといつて必ずしも崇徳側に与すべきでないといふだけでなく、人倫にもとる後白河にもまた従うべきではないのではないか。

曰く、孔子助けず。蓋し仕へざるなり。既に食む者は其の難を避くるを得ず。子路是れのみ。是の時に當り、天下の仕ふる者、孰れか王官に任じ王主を食まざらん。而して王の難を避けて身之を踐まず、恬然として、吾が王夷・齊たること能はずと言はば可ならんや。

これに対する答えとしては、孔子が輒を助けなかつたのは、衛に仕えていなかったからである。以前より仕えて禄を食んでいる者は、その難を避けることはできない。衛に仕えていた子路が戦死したのはそのためである。よつてこの時に当たつて、天下に仕える者で誰が、天子の官職に任じ、天子の禄を食まないう者があるうか。天子の官職に任じ、天子の禄を食みながら、天子の御難儀のある時に走

り避つて身に受けず、恬然として我が君は伯夷叔齊の謙讓の徳を學んでおられないので、仕えられないと言ふことが出来ようか。したがつて、三種の神器のある所を見て、死を致さずしてはおけないのである。

是より先き、上皇鳥羽宮に在り。鳥羽帝崩じて七日、法會を田中殿に修す。上皇臨み給はず。是に至りて將に宮を出でんとす。參議藤原教長之を諫むれども聽れず。言を齋院の行啓に託し、入りて白河前の齋院の第に居り、移りて北殿に據る。帝、平信兼をして賴長を檀川に要せしむ。賴長、問道より白河に入る。帝、急を美福門院に告ぐ。門院は遺詔を矯めて、安藝守平清盛を召して禁中を警衛せしむ。

これより先、鳥羽上皇は田中殿にて崩御し給ひ、崇徳上皇は同殿にお移りになられたが、四十九日の法会にも臨席されず、鳥羽宮を御出でなさうとした。そこで參議の藤原教長は上皇を諫めたが御聴き納れにならなかつた。さらに齋院（未婚の皇女で伊勢と加茂の兩神宮に奉仕した）の行啓にかこつけて、前の齋院の邸宅である白河殿に行幸され、その北殿に立て籠られた。御白河天皇は、平信兼をして、藤原賴長を檀川（古、宇治から京都に行けば必ず渡る川とされた）という所で待ち伏せして捕まえようとしたが、賴長は間を通つて白河殿に入つた。そこで天皇は急を美福門

院告げ給うと、門院は鳥羽法皇の遺詔を矯め、安芸守平清盛を召して禁内を警衛させた。

臣愿曰く、平清盛の母は、乃ち重仁親王の乳母なり。鳥羽帝、將士に遺詔するに、獨り清盛に及ばず。蓋し之を疑ふなり。而して清盛は女院の召に應じ、上皇の異圖に與らず。之を源爲義に比するに、明暗、果して如何となす。

清盛の母は、重仁親王（崇徳天皇の皇子）の乳母であつたので、鳥羽法皇は名ある武將たちには御遺勅を仰せ下されたが、重仁親王と因みある清盛は疑いなされて下されなかつたのである。かくして清盛は門院の召しに應じ、崇徳上皇の異謀には与しなかつた。これは、源爲義（義朝の父）と比べて見るに、甚しい明暗の違いがある。

或は謂ふ。清盛、重仁に忍ぶ。將た何ぞ忍ぶざる所ぞ。

また或る人が言うには、清盛は重仁親王の乳兄弟であり、厚き恩愛があるはずであるのに非情にも見捨てたのであるから、誰に対しても酷薄で不仁な人間であつたということである。

曰く、王法は義を先きにして情を先きにせず。公を論じて私を論ぜざること、猶ほ衡の平か

に、鑑の明なるが如し。未だ來らざるは迎へず、既に往くは追はず。善に向ふの方を視て、過を改むるの道を開く。是を以て、妍嬪逃るべからず、輕重差ふべからずと雖も、而も之を怨む者なし。夫の保元は召に女院に應じ、平治は帝を賊中に脱するが如きは、皆清盛の功なり。其の後來の罪惡を以て、今日の忠勳を細くるは、豈に王の大法ならんや。

こうした批判に対して潜鋒は曰く、王道は義を第一にして人情をいわず、公を論じて私を論ぜず、すなわち、親類縁者の親しみを後にし、公の議論を専らにして親近への依怙量

肩をしない。例えば天秤の衡平なるが如く、鏡の明らかなるが如しである。まだ見えぬ惡は迎え探らず、往き過ぎた過ちを追つめて穿鑿はしない。人の善に向う道筋を手引きして過去の過ちを改める道を開く。かくして王道の政は鏡の如く、美しきは美しくあしらい、醜きは醜くあしらつて少しも逃げられず、秤の如く、輕きは輕く、重きは重く、少しも違うことがない。かくの如く善惡邪正を明晰すること、少しも遠慮会釈もないが、その心に私心がないので、誰も怨む者はない。王道の政治とはそういうものである。彼の清盛、保元の乱では、美福門院の召しに應じて皇朝の難を鎮め、平治の乱では二條天皇を賊中から脱出させ奉つて危難を救つたのは大功といふべきである。その後榮華の余りに不忠節をした罪惡を以て今の忠功が用に立たないといつ

て斥けるならば、どうして王道の天下を治める大法といえようか。

上皇、教長をして、源義朝の父、前檢非違使爲義を召さしむ。爲義辭して曰く、上は臣が義家の後たるを以て、兵を知る者となさんか。然るに臣の壯なる時も猶ほ人に如かず。今は老いぬ。能くすななきのみ。嚮に男山に禱る。神凶を告ぐ。又家に八甲を藏む。森風の爲めに吹飄せらるるを夢みたり。意、甚だ之を惡むと。

崇徳天皇は藤原教長をして、源義朝の父、前の檢非違使源爲義を召さしめた。しかし爲義はこれを辭するというのに、主上は臣が源義家の末裔なるによつて、兵法を知る者と爲されたのであろうか。しかしながら臣はいまや老いて壯健ではなく、役に立たない。以前、男山の石清水八幡で祈禱をしたところ、凶のお告げが出た。また、家に源氏重代の鎧八領を藏しているが、これがつむじ風の為に翻される夢を見て、甚だ快くないと。

教長曰く、夢は固と常定なし。故に夢幻泡影といふ。況んや身は武將にして、而も夢に感じて拘忌を説く。敢て奏せざるなり。親ら宮に至り之を辭すべしと。爲義言屈して、賴賢・賴長・爲成・爲朝・爲仲を率ゐて、上皇の宮に至る。

そこで教長が言うのは、夢はもとより正脈のあるものではない。されば金剛経にも物の確かでないことを夢幻泡影と言っている。ましてや武將の身として夢見が悪いのが忌々しいというような生温かいことがいえようか。その様な筋道の立たないことは我々はとも奏聞できないから、直々に御所を参つて辞退申されよとのことであつた。そこで為義はこの言に屈して一言も出さず、遂には子の頼賢、頼仲、為成、為朝、為仲を引き俱して上皇の宮に至つた。

臣愿曰く、上皇讃岐に至る。帝、人をして書庫を検せしむるに一匣あり。常、發いて之を視る。乃ち感夢の記なり。屢屢重祚を夢み、夢みる毎に必ず禱り給ふ。上皇の夢は猶ほ梁武乙卯の夢の如し。其の兵を構ふること、未だ夢の爲めに誤まられずんばあらず。既に命に安んずること能はず。甲兵之を務め、吉夢巨萬を累ぬと雖も、祥其れ保つべけんや。

臣、潜鋒申し上げます。(保元の乱後)上皇を讃岐に移して後、後白河天皇は上皇のましました東三條の御所へ人を遣わされて、御書物庫を検見なされた処、一つの箱があつた。何となく秘密がありそうだったので天皇開いて御覧になった処、それは上皇の夢の記録であつた。

そこには、しばしば再び帝位に即きなされた夢を御覧になったとあり、その度に必ず御

祈りをされたと記されていた。上皇の夢は丁度、梁の武帝の乙卯の夢というのと同じで、神靈のお告げでも何でもなかった。昔、南朝の梁の武帝は、何とか天下を統一したいと常に思つていたので、ある年乙卯の日の夜の夢に天下の諸侯が皆国を獻じて降参するのを見た。そこで翌朝出頭した近臣は武帝に諛つて、これは天下統一の瑞祥であるといった。その後、魏の臣の候景というものが、河南の地十三州を差上て降参したいといつて使者を指し向けた際、その使者が申すには候景が降参を思い立つたのは、正しく正月乙卯の日とのことであつた。武帝はいよいよ神妙な事であるとして降参を受け入れたが、後に候景は謀反して武帝を殺し、梁も滅んだ。

この度、崇徳上皇が兵を構えて後白河天皇を亡そうとなされたのも、梁武と同じことで、夢に誤られたのである。上皇の御身分として、御讓位された後は、天命に安んじて閑居なされる筈であるのに、そうではなくて軍兵を集め、戦の準備に務められた。この様な躁暴なるご合点では、毎日毎夜、良い夢を万々見なされたとしても、吉祥があるという保証などあるうか。

源爲義、大義を力陳して以て教長に諭す能はず。徒に辭するに晝寢・夜寢の髣髴する所を以てす。一たび教長の爲めに屈せられて、復た對ふる能はざる所以なり。自ら此の役に死するを知りて、鐵冑を諸子に分かつと雖も、

義に於いて何の補ふ所あらん。

源爲義は力めて父子兄弟の大義を云い陳て、教長を諭することはできなくて、ただ昼寝夜寝に見た夢を以つて召命を辭するのみであつた。この様な浅はかなことであつたから教長に言いこめられて返答も出来なかつたのである。自ら今度の戦に必ず死ぬことを知つて、子供達にそれぞれ重代の甲冑を形見として贈つたといへ、何の義理の補いになろうか。

蓋し心の物たる、靈明洞徹にして、熟寢久臥と雖も未だ嘗て體氣を昏息せざるものあり。故に平生の動思、皆以て夢をなすのみ。其の性定まり、氣靜かなるに至りては、復た常人の昏夢雜擾、情狀千萬なるが若きにあらざるなり。

心という物のあり様は、靈驗あらたかで少しも曇りが無く、洞穴の様に通り抜けて、少しも障り無く、熟睡し久しく臥してもいても肉体と共に休息せず、生きて働いている。

故に平生の動思(身の動き心の思い)が夢になつて様々な形で表れるのである。したがつて平生の動思の正しい人は夢も正しく、その妄なる人は夢も妄となるのであり、その徳性が堅定にして氣性の正靜なる君子などは、常人の錯雜騷擾たる千にも万にも入り乱れた夢など見ないのである。

夫の之を頼みて嚮導を得、良弼を獲る如きは、一心純實、天と間なくして、思念の感ずる所、精誠の格る所、又豈に偶然ならんや。

かつて神武天皇が夢によつて八咫鳥という案内者を得、終に葦原中つ国を平定され、また殷の高宗の夢に賢人の姿を見て、絵図に映して天下に尋ねた処、傳説という賢人を良臣に得られて天下を治めなされた。これは、一心一毛の雑念なく、天と少しの隔てが無く、思いの徹する所、精誠の至極する所を以て、天下から示しなされたものであるから、どうして偶然の仕合せといふことがあろうか。

其の妄りに信ずる者は、往往之が爲に誤らるること、上皇・梁武の如く、其の多く疑ふ者は神武・高宗の事を併せて、假託に出づるとなす。賢智の過ぎ、愚不肖の及ばざること、此れ亦見るべし。

夢を妄らに信じる者は、往々にして夢に誤られることは、崇徳天皇や梁の武帝の如くであり、また疑り深く、さかしらを立てる者は、神武天皇や殷の高宗の夢をも事実ではないかこつてである云つて大聖至誠の至りを知らない。これは、『中庸』にいう「賢者は之に過ぎ、不肖者は及ばざるなり」という事がここでも見える。

爲義策を陳べて曰く、兵悉く義朝に従ふ。臣

の率ゐる所、特に寡し。敵を此に拒ぐは謀にあらざるなり。宇治に據り橋を徹するにあらずんば、甲賀山を背にして阪東の兵を俟たん。兵若し至らずば、乘輿關東に幸するのみと。頼長從はず。

為義は策を陳べて言つた。兵は悉く義朝に従い、臣（為義）の率いる所には、特に少ない。よつて敵をここで防ぐのは上策ではない。宇治に拠つて橋を撤去するのだから、甲賀山（滋賀県南東部にある山）を背にして坂東武者の集結を待つべきである。そして、もし兵が来なければ、上皇は關東に行幸されるべきであると。しかし、藤原頼長はこの建策に従わなかつた。

上皇、平忠正・源頼憲・爲義・爲朝・平家弘をして、四門を分ち守らしむ。

崇徳上皇は、平忠正、源頼憲、為朝、平家弘をして四門を分ち守らしめた。

頼長戰略を議す。爲朝進みて曰く、臣久しく鎮西に在りて、九國を威伏す。大戰二十餘、小戦無數にして、利は夜不意に出づるに在り。臣請ふ、今夜高松殿を襲ひ、火を三面に放ち、之を一方に要せば、縦ひ兄義朝善く戦ふとも、臣一射して之を斃さん。平清盛輩は弱手緩筋、直ちに鎧裳を用ゐて披拂せんのみ。乃ち鳳輦を取りて此の地に徒し、陛下を

禁内に奉ぜば、東方未だ明けざるに、事已に定まらんと。辭氣悍烈、回避する所なし。

頼長合戦の謀計を議するに、為朝が進み出て言つた。臣（為朝）は久しく筑紫に在つて九州を威伏しました。大戦すること二十回余り、小さな戦は無数ありますが、有利なのは不意に夜討ちをかける戦略です。ついては、今夜（後白河の内裏である）高松殿を襲い、火を三面に放つて残りの一方で待ち伏せして帝を捕え奉ることを奏請致しますと。たとえ我が兄義朝よく戦うとも、臣が一射にしてこれを斃しましう。平清盛など弱手のへるへる矢は、鎧袖一触にして澁ね飛ばすまでです。そうして御白河天皇を白河に押し籠め奉り陛下（崇徳上皇）を禁裏へお移しすれば、一夜のうちに事は定まりましよう。その辞氣は猛く激しく直言して憚らなかつた。

頼長曰く、兩帝、國を爭ふ。當に堂堂の陣を張るべし。豈に郵巷私闘に同じからんや。今、兵未だ集らず、應に明日を待つべし。興福寺の僧徒、必ず來り會せんと。爲朝退いて曰く、阿兄略あり。今夜必ず我を襲はん。吾れ屬虜とならんのみ。奚の暇あつてか明日吉野法師と奈良大衆とを用ゐんやと。

これに対して頼長が言うには、この度は兩帝が天下を爭う戦なのであるから正々堂々明白なる備え立てをすべきである。どうして、

その方が平生し習いたる村里の小競り合ひなどの様に、夜討など用いようか。まだ兵が集まつていないが、明日まで待てば、興福寺の僧が必ず参じるだろう。

為朝はその場を退いて言つた。我が兄（頼朝）は兵法に長じているから今夜必ず奇襲をかけてくるだろう。そうしたら我々は虜にされるだろう。どうして明日まで、吉野と奈良の僧兵を待つ暇などあるうか。

臣愿曰く、寡は以て衆に敵すべからず。小は以て大に勝つべからず。勝つべからず、敵すべからざる者は常勢なり。其の敵し、其の勝つは奇なり。故に之を善くする者は、奇を出して窮りなし。小と大と寡と衆とを論ぜず。

臣、潜鋒申し上げます。衆寡徹せず、小は以て大に勝つべからず。小寡が大衆にかつべからず、敵すべからざるは常勢である。しかしその中でも見事寡を以て衆に敵し、小以て大に勝つは奇を用いたためである。古より兵を良くする者は奇変を出すことは窮りない。かくの如き者は、大小衆寡の別は關係がなく、毎回小寡で大利を得るものである。

且つ六十萬を以て楚に勝ち、四十萬を以て秦に勝つは惟だ王翦・項籍にして、多多益益辨する者は韓信のみ。趙括の白起に於ける、王尋の世祖に於ける、曹操・苻堅の周瑜・謝玄に於ける、皆以て兵多の戒となすに足る。

その上、大軍を使うことは、中々尋常の大將の及ぶことではない。六十万人の人数を以て楚に勝つたのは秦の王翦が名將だったが故であり、四十万の大軍を以て函谷関を破り、子嬰（秦の三代皇帝）を虜にしたのは項羽が名將であつたが故である。さらに、こうして軍勢の数が多ければ多い程、ますます使いやすいついという者は、古今唯一人韓信のみである。趙の国の大將趙括は秦の大將白起と戦つたとき、全軍が幾許かを知らず、其の坑に埋め殺された者だけでも四十万人にして、自らも殺された。これは、趙括が大軍を使えなかつたためである。また、王莽の大將王尋、四十二万の大軍を率いて世祖、すなわち後漢の光武帝の兵八千人と戦ひ大敗して誅せられた。これも王尋が大軍を使えなかつたからである。

他にも魏の曹操は千古の名將であるが、九十万の大軍を以て呉の周瑜が三万の軍に敗け、秦の苻堅は大国の英主であつたが、九十万人を以て晋の謝玄が八万に敗たのは皆この類であり、これ兵多ければ敗れやすとして、戒めとするべきである。今度の保元の戦についても、兵が少ないからこそ謀もあるはずであるのに、頼長は只大軍を欲して吉野や奈良の僧徒に頼ろうとした。兵法に疎いこと甚しいというべきである。

源爲朝は膽勇明決にして、善く奇を制する者と謂ひつべし。蓋し頼長、志を改め過を悔ひ、

兵を遏め和を講ずるは策の上なり。既に然ること能はずして、之を爲義に任じ、之を爲朝に付す。猶ほ未だ策の中下を失はず。居然として敵を宮門に受くるは、所謂無策なる者にあらずや。

源為朝は大胆にして明晰、兵の奇策をよく制する者というべきであつた。

そこでもし頼長が今までの謀逆を改め悔て講和していたなら策の上であり、そうはいかなくても、謀を爲義に任せ、これを爲朝に付託していたならば、まだ策の中下を失わなかつたのである。しかるにただあつけにとられて、敵の来襲を受けたのはいわゆる無策というもので、頼長の失計であつた。

庚戌、高松殿は湫隘なるを以て、遷りて東三條殿に御す。親ら璽を抱いて腰輿に御し給ひ、關白忠通以下、文武百官扈從す。黎明、義朝・清盛以下の諸將、白河殿を攻め、暗に乗じて鼓譟す。兵勢甚だ熾なり。爲朝等、防戦して決せず。義朝奏す、宜しく以て火攻にすべしと。制可す。因つて火を上風に縦てば、煙焰宮を掩ふ。諸將膽落ちて、敢て格ぐ者なし。平家弘・平光弘、馳せて殿門に入り、呼んで曰く、敵多く我れ寡し。加ふるに火を以て勢を助く。我が軍復た戦ふべからず。乘輿當に宮を出づべしと。上皇倉皇として馬に上りて、騎に勝へ給はず。藏人平信實、重騎して扶掖す。頼長は流矢に中つて死せり。

七月十一日、高松殿は土地が低く湿気が多いことを理由に、後白河天皇は東三條殿にお遷りになった。その際、天皇御自ら三種の神器を抱いてお御輿に乗られた。関白忠通以下、文武の諸臣がつき従つた。明け方、義朝、清盛以下の諸將は、白河殿を攻め、暗に乗じて関の声を上げ、その勢い甚だ熾んであつた。爲朝等防戦したが勝敗決つしなかつた。そこで、義朝は後白河天皇に上奏し、火攻めすべきことを申し上げ裁可されたので、火を風上方向に放つと、火は煙煙と御殿を掩つた。上皇方の諸將は落胆して敢えて防戦する者もなく、平家弘、平光弘は馳せて殿門に入り、敵多く我少なく、火を以て勢を益して来たので、我が軍はまた戦うことが出来ませぬ。ついでには上皇速かに御殿を出で給えと言つた。上皇はあわてふためいて馬に乘ろうとされたが、鞍坪（またがる所）で止まることが出来ず、藏人の平信實が尻馬に乗り上皇を抱きかかえた。この戦いで藤原頼長は流れ矢に當つて死んだ。

臣愿曰く、當時號して經濟の學となす者は、頼長・信西なり。頼長は亦た毎に忠通の書を善くし、歌詩を好むを笑ひて曰く、小技曲藝。經邦の要にあらずと。其の自ら言ふこと此の如し。然して信西は深沈確實、これを政事に施して以て其の用を見るに足るなり。頼長は經傳、其の精を極むと雖も、徒らに章句の末のみ。史子其の多きを務むと雖も、

徒らに記誦の陋のみ。將に辨博を以て一世を睥睨せんとす。苟も比して之を信西に同じくす。可ならんや。

臣潜鋒申し上げます。当時經世済民の学のある人と天下に唱えられたのは藤原頼長と信西の二人であつた。頼長はつねに兄の忠通が書を良くし歌詩を好んだのを小技曲芸として笑い、高大正明の学ではないと譏つた。しかし、一方の信西は、心を深く取り沈めた確実なる人間であり、政治を行つてもその功用は明らかであつた。頼長は經書やその注釈書の精を極めたが、ただ章句の末に走り、史書や多くの思想家の本を読んだが、ただ古書を記憶し諳んじただけの固陋な学問であつた。そして己の博覽強記を以て天下の人を見下した輕薄なる人間であつた。これを信西と比較して同等扱ひすることが出来ようか。

但し其の利を視て義を忘れ、私を先きにして公を遺れ、齷齪として自ら用ゐて大體を知らざるは、則ち異なることなし。共に禍敗を取る所以なり。而して信西は其の首領を保つこと能はずと雖も、其の臣たることを失はず。頼長は直ちに賊のみ。之を治承に追崇し、之を元暦に廟祀す、豈に幸の甚だしきものにあらずや。

ただし、己の利を見て義を忘れ、私を先にして公の道理を打ち捨て、人の言を用いず、

あくせくして己の料簡のみを用いて、天下国家の政の大体に於いて合点がないという点では両者は同じであつた。またそうだからこそ両者は禍にあつて身を亡ぼしたのである。しかし、信西は斬死を免れなかつたが人臣として恥じる点はなかつたのに対して、頼長は上皇についたことから逆賊ではあるが、後に治承年間に追崇して太政大臣正一位を贈られ、元暦年間には崇徳上皇と一緒に春日河原の社に祀られたのは幸甚であつた。

上皇、如意山に至る。爲義・家弘・光弘・季能等従ふ。山路嶮巖にして馬を下りて徒歩す。上皇、行歩に習ひ給はず。荊石を刺し、泥血交々流れ、絶えて復た蘇へる。諸將に謂ひて曰く、朕自ら取る、汝が輩に罪なし。當に速かに出でで降るべし。朕、神耗し力屈し復た行くを得ず。追兵至らば降を乞ふのみと。諸將泣いて曰く、臣等、死を以て終始せんと。上皇曰く、從者多く在らば、後禍貲られずと、嗚咽して去る。惟だ家弘・光弘肯て去らず。扶持して谷に下り、樹を折りて蔭庇す。昏暮、家弘父子は遮に上皇を負ひ奉り、京師に出づ。敢て舍し匿くす者なし。深夜、智足院の僧坊に入り、湯粥を得て之を進む。翌日、上皇薙髮し、仁和寺に至る。覺性法親王内れず、之を帝に聞す。帝、式部大夫重成を遣はし、之を守り、尋いで讃岐に徙し奉る。重成防衛して鳥羽を過ぐ。山陵を拜辭せんとすれども、重成命を奉ぜず。

上皇は如意山に落ち延び給い、源為義、平家弘、光弘父子、藤原季能がこれに従った。しかし、山路が險難なため馬を下りて徒歩することになったが、上皇は歩行になれさせ給わず、荊石が御足に刺さつて血がどろどろと流れ、氣絶してはまた蘇るといふ有様であつた。上皇は諸將に向つて、禍は朕自ら引き受ける。汝等に罪はないのであるから速かに投降してもよい。朕は精神消耗して力が尽きたので、これ以上行くことは出来ない。もし追手の兵が来たら降服を乞うのみであると仰せ

になったので、諸將は泣いて臣等はただ一死あるのみでありますと申し上げた。それでも上皇は従者が多くあれば、後禍も計り知れないと仰せになったので、諸將は咽び泣いてその場を去り、ただ家弘、光弘父子のみ留まつた。そして上皇をお助けして谷に下り、樹の枝を折つて日陰とした。夕暮、家弘父子は互いに上皇を背負つて都に出でたが、あえて彼らを宿に匿う者となかつた。深夜智足院の僧坊に入り、湯粥を得給うた。翌日、上皇薙髪して、仁和寺に至り、庇護を求め給うたが、時の仁和寺五世覺性法親王は上皇の御弟であつたにもかかわらず、容れ給わず、むしろこのことを後白河天皇に報じられた。そこで天皇は源重成を遣つて上皇を護送せしめ、讃岐にお移した。途中鳥羽を過ぎた際、上皇は鳥羽天皇の山稜を御参拝なされんことを願われたが重成はその命を奉じなかつた。

臣願曰く、帝は既に菟道・顯宗の讓なく、而して上皇も亦、仁徳・仁賢の德に乏し。母兄の親、太上の尊を以て躬を叢林山野に託せんと欲して猶ほ得ず。勝て嘆ずべけんや。

臣潜鋒申し上げます。昔、菟道稚郎は弟として兄である仁徳天皇に位を譲り給い、また顯宗天皇も兄である仁賢天皇に位を譲られた。この様な兄弟間の謙讓の美德が上皇と天皇に乏しく、この度の大乱を招いた。崇徳上皇は、親戚關係からいえば、後白河天皇の同腹の兄であり、尊貴なる点でいえば、太上天皇の位にあるのに、この様に狼狽し給いて山林草野に御身を匿し給い、一夜の宿を借り給わんとしても叶わなかつた。嘆いても余りあることである。

蓋し、桓武の遷都以降、廢天子はあるも、未だ流天子を聞かず。是に至り、禍門一たび開けて、因襲例となり、承久・元弘、陪臣の天子を處する毎に、常に之を荒陬僻海に遷して後已む。

けだし、桓武天皇の平安遷都以降、廢天子（元慶八年、藤原基経が陽成天皇を廢し奉つた。）の例はあつたが、いまだ流天子（天皇の配流）の事を聞かなかつた。しかし、この度崇徳上皇が讃岐に流され給うた事が、禍端を開き後の悪しき前例となつたのである。すなわち承久三年に北条義時が、後鳥羽上皇を

隱岐に土御門天皇を土佐に順徳天皇を佐渡に流し奉り、元弘二年に北条高時が後醍醐天皇を隱岐に流し奉つた。かくして、北条の様な鎌倉の陪臣（天皇の臣の臣）が天下を差配し、事ある毎に天子を僻陬の地に遷し奉つたのである。

夫れ上皇亂を構へ兵を召す。醞釀積鬱既に已に彼の如くんば、六軍一たび敗れて鬣髪して降を乞ふは、非を悔い、過を改むるにあらざるなり。勢窮し、力屈するにあらずや。徒らに死を畏るのみ、其の恥を知らざるも亦甚だし。

上皇がこの度乱を構え兵を召し給うたのは、色々の工夫をこらし、用意を積み重ね給うたものであることは右に見た通りであるから、上皇の御陣が一度敗れたからといって慌てふためいて剃髪し、降服を乞い給うたのは、御自らの非を悔い、過ちを改めたからではない。たとえ一敗地に塗れたとしても、諸將兵卒は皆元氣なのであるから、比叡山に上るなり関東に遷幸なされるなり手立てがなかつた訳ではない。それでも降服したのは、勢いが窮まり、力が屈したからではなく、只死を怖れるあまりに腰が抜けたからである。誠にこの様な上皇の御志は恥といふことのあるを知ろしめさぬこと、甚だしいといふべきである。

信西の謀を以て、陽に反人の竄流を定む。

叛徒、以て死を免るることなし、教長已下、祝髪して僧となる者多し。爲義・忠正も亦出でて降る。忠正は清盛の叔父なり。以爲へらく、我之を殺さば、義朝、勢、應に父を殺すべしと。遂に忠正を誅す。義朝固く爲義の死を滅せんことを丐ふ。帝、果して怒り給ひて曰く、兄弟の子は猶ほ子の如し。清盛已に忠正を誅す。義朝何ぞ爲義を誅するを辭するやと。義朝遂に鎌田正清をして爲義を殺さしむ。

保元の乱後、崇徳上皇側の殘党は、ことごとく山林海浜に身を潜めていたが、信西は謀計により、偽つて謀反人どもの配地を書き付け、誰をどの国に流すと言ひ触らしたところ、案の定、謀反人どもは、死罪を免れると思つて、藤原教長以下、髪を落とし、僧となつて出頭する者が多く、源為義、平忠正もまた投降した。平忠正は、清盛の叔父であつたので、清盛は自分が忠正を殺せば、義朝も勢い父の爲義を殺さざるを得なくなるであろうと思ひ、ついに忠正を謀殺した。

もとより、義朝は、爲義が死罪一等を滅せんことを乞うたが、後白河天皇は、怒り給ひ、兄弟の子は実の子の如くであるのに、清盛は忠正を殺した。それなのに、どうして義朝は爲義を誅する事を辭するのかと仰せになつた。そこで、義朝はついに家臣の鎌田正清をして爲義を殺さしめたのである。

臣愿曰く、臣の君に於ける、子の父に於ける、在る所死を致すのみ。義朝は勤王の日に當り、父に抗せざるを得ず。寧ろ血を吐くの趙苞となるも、心を指すの徐庶たるべからず。禍亂既に平らぎ其の父我れに歸す。豈に其の子從いて之を殺すの道あらんや。君命に方ひ、與に俱に鼎鑊に就くと雖も可なり。

臣潜鋒申し上げます。臣下が主君に仕え、子が父に仕える道は一つである。

只その行き当たった所で死するのみであり、父の御用の場であれば、父の為に死し、君の御用の場であれば、君の為に死するのみである。義朝王事を勤めて、後白河天皇の御用に戦う日になつては、父にも抗さねばならない。例えば、血を吐いて、母を見殺しにした悔恨の為に死んだ趙苞となつても、胸を指差して降参した徐庶となつてはならない。(趙苞は後漢の人。鮮卑人寇した際に母を捕えられ、賊を破ったが母を殺された。趙は母を葬った後、血を吐て死んだ。一方の徐庶は劉備に仕えたが、母が曹操に捕えられたため、自分の胸を指し、この胸三寸が乱れているので王

覇の業を共に図ることは出来ないと言つて曹操に降つた。)しかし戦乱が平らいで後、折角父が子を頼みに身を寄せて来たのを子たる者がすぐに捕えて殺す道理があるものか。とても人間の道ではない。たとえ君命に逆らい違勅朝敵の罪を仰せ付けられ、父子共に釜茹での刑に処せられるとも本望である。

源頼朝兵を擧ぐるや、伊東祐親を捕へ、將に子の祐清を賞せんとす。祐清辭して曰く、父囚はれ子賞せらるるは聞く所にあらず。臣、冀くば平氏に屬せんと。時に之を義とす。

源頼朝は兵を挙げると、昔頼朝を殺そうとした平家方の伊東祐親を捕え、祐親の二男である祐清には賞禄を与えようとした。祐清は、かつて祐親が殺そうとしていたのを頼朝に告げ、難を逃れしめたからである。しかし、祐清は、父がすでに囚われているのに子が賞せられるということなど聞いたことがないといつて、この申し出を辞退し、乞ひ願わくば、平家に加わりたいと申ししたので、世間はこれを以て美談とした。

蓋し、邦の將に廢せんとするや、正氣萎墮し、人心道を遺る。保元の政、子の父を庇ふ能はざる所なり。家の將に興らんとするや、正氣滂沛し、人心義を重んず。頼朝の起るや、子敢て父に叛かざるなり。

けだし、国がまさに荒廢しようとする、正氣が萎え衰え、人心が道義を忘れるものである。正氣とは孟子のいう浩然の氣のことであり、天地の間に流行して人心に存する至大至剛の氣のことである。この正氣が衰えた為、保元の乱では、子が父を庇うことができなかった。(義朝と為義のこと) 対して家がまさに興隆しようすると、正氣は盛大にみ

なぎり、人心は義を重んじる様になる。この故に、頼朝が決起するも子はあえて父に背かなかった(祐清が父祐親の為に死んだこと)。これは関東が勃興する上での正氣の発露である。

源親房曰く、子、或は兇悖なれば、父、得て之を殺さん。石錯是なり。父、無道と雖も、子、得て之を殺すことは未だ之を聞かざるなり。名教の振はざるは、皇道の淪墜する所以なり。義朝は言ふに足らず。信西、政事を執り、令する所此の如し。王室張らんと欲するも得べからず。

北畠親房『神皇正統記』に曰く、「子が悪逆非道であれば、父はその子を殺しても良い。昔、石碯の子石厚がその君恒公を殺したので、石碯は厚を誅した例がこれである。しかし父がいかに無道なりといえども、子が父を殺して良いなどということはいまだかつて聞いたことがない。」と。

皇威が失墮したのは、三綱五倫の名教が荒廢し人倫が墮落したからである。父を殺した義朝などは禽獸の輩であるから言うに足らないが、信西の様な経世済民の才ありと称する者でも、この様に父を殺す命令を下す様では、どうして皇室が振興しえようか。

戊午、家弘已下、子弟黨與七十餘人を斬る。弘仁に藤原仲成を誅して後、三百四十餘年、

幾ど刑措くことを致す。是に至りて廷議以爲へらく、死刑久しく廢す。當に之を諒闇に行ふべからずと。信西、竊に奏して曰く悉く之を誅するにあらずんば、恐らくは後患を生ぜんと。政に子弟黨與、一も宥赦するなし。時に以て刑に淫すとなす。

七月十九日、平家弘以下の子弟郎党七十余人が斬刑に処された。これは嵯峨天皇の御世の弘仁年間に藤原仲成(中納言種継の子。鎌足より六代の後裔)が平城天皇に勧め奉りて乱を起して処刑された薬子の変以来、三百四十余年中断していた死刑が復活した。朝廷では公卿達が僉議し、死刑が久しく廢止されていたのに、これを天子鳥羽法皇の喪中に行うべきではないと言ったが、信西が、ことごとく反徒を誅するのでなければ後患を生ずるだろうと密奏したので、家弘以下の子弟郎党は一人として宥免されることなく殺された。当時の人はこれを刑を濫りに行うものといふ。見倣した。

庚申、詔して左史生中原師信を南都に遣はし、頼長の墓を發驗させ、僧寛曉に詔して、重仁親王をして難髪せしむ。癸亥、詔して頼長が子兼長・師長・隆長已下十三人を遠流す。惟だ前關白忠實は忠通の保護によつて乃ち免る。

七月二十一日、詔して左史生の中原師信を

南都（奈良）に遣わし、頼長の墓を掘り起して死骸を検察させた。また仁和寺花藏院の僧正寛暁に詔して、重仁親王を剃髪させた。七月二十四日、詔して頼長の子である兼長、師長、隆長以下の十三人を遠流に処した。ただ、前関白の忠実な忠通の保護によって刑を免れた。

臣愿曰く、種子命たねののみこと中臣祓なかつを上るの後、上宮太子憲法かみみやうたいしけほふを作り、不比等律令ふひとつりやうを著し、而して格式の書きやくしき、相繼いで、編を弘仁・貞觀・延喜の間に成せり。

臣潜鋒申し上げます。種子命（中臣の祖である天兒屋命の孫）が中臣祓を作つて神武天皇に奉つて後、聖德太子が十七条の憲法を作り、藤原不比等、大宝と養老の間に律令を著し、格式もまた相次いで弘仁、貞觀、延喜の間に編纂された。

上、名器めいきを尊重し、下、廉恥れんちを砥厲しれいし、刑、士大夫に上らず、辱、大臣に至ることなし。

それより、上は名器、すなわち名は中納言、大政大臣等の名、器は冠服や車馬など、尊卑の上下を示す表章を尊重することで、下に仕る者は各々廉恥を知り、節義を砥で身を慎んだ為に、朝廷の官職ある士大夫たるものが笞杖の刑罰を受けることはなく、またいかなる罪があつても、雑言無礼を大臣に浴びせ、恥

をかかせるということもなかった。

仁愛過厚の極、萎靡姑息の弊なき能はずと雖も、而も之を相を獄に繋ぎ、將を斬るの慘酷に比すれば、則ち厚薄仁暴、豈に宮に霄壤のみならんや。

政治のあり方が右の様であつたので、あまり上の仁愛が厚きに過て、その至極には、萎靡姑息の弊害（柔和に過てその場しのぎで何でも許される）が無いことも無かつたが、これをシナのように、人臣位を極めた人間を少しの罪があつたからと云つて獄に繋ぎ、大將軍を縛り上げて市場で斬る様な残忍酷薄な仕方と比べて見れば、その厚薄仁暴の落差は、天地の隔たり以上のものがある。

是の時に當つて、反側子を誅し、人にて刑に淫すとなす者は、其の言過厚の餘に出づ。亦これ見るべし。蓋し信西は博覽にして或は申・韓の刑名の術に通じ、將に威柄を張りて後人を懲さんとす。敢て殺戮を擅にするにあらざるなり。然るに伴つて竄流を定め、實は死刑に處す。烏んぞ王者至誠大公の政に在らんや。何を以てか後過なきを保せんや。

この時に當つて、反逆の党類を誅すことは、さしたる暴悪ともいえず、それさへも、刑罰の乱用と言うのであれば、その言は恩愛が過厚な余りに出たものと言ふべきである。信西

は博覽強記にして、申不害や韓非子等の法家の術に通じ、国家の威権を張大にして後人を懲らしめようとしたのであつて、むやみやたらと殺戮を恣まましたのではなかつた。しかし偽計によつて配流すると定めて、実は誅殺し、下に詐術を用いる様では、どうして王者たるに適しい至誠大公の政事と言えようか。またどうして後の禍無きを保証できようか。

八月、法皇讃岐の松山に抵り、宮を直島に造る。後に志度の鼓の岡に徙る。窮居僻遠にして居常不聊なり。親ら血を刺して五部の大乘經を書し、三年にして成る。平治元年春、之を覺性法親王に送り給ひ、安樂壽院に藏めん事を請ふ。覺性及び忠通、爲めに奏請すれども、帝許さずして之を還す。法王怒り給ひて曰く、叔姪兵を交へ、兄弟相仇するは古よりこれあり。朕、懺悔の爲めに佛書を親書す。特に冥福を修むるのみにして、今生の爲めにあらず。而も今且つ、之を藏むることを許さざるかと。乃ち舌を齧み血を出し、毎軸に書して曰く、願はくば大魔王となりて、天下を悩亂せん。五部の大乘經を以て、惡道を廻向すと。是れより髪を剃り爪を剪らず。舊褐を衣て長巾を戴き、齒を切はり目を瞋らし、慘悴骨立す。長寛二年秋八月己卯、志度に崩じ給ふ。年四十六。崩後亂逆相繼ぎ、世、以て所崇となす。敕して廟を春日河原に建て粟田宮といひ、毎歳八月奉祀す。

八月、崇徳上皇は讃岐の松山に至り、宮殿を松山の北西の沖にある直島に造営された。後、志度の鼓の岡に移り給うたが、窮居僻遠にして何のお楽しみもなく、万事味気ないお暮らしをされた。上皇は御親ら指を刺して五部の大乘經（華嚴經・大集經・大品般若經・法華經・涅槃經）を血書し給ひ、三年にして完成された。そこで平治元年これを仁和寺の覺性法親王に送り、御父鳥羽天皇の陵がある安樂壽院に藏めることを請うたので、覺性は忠通とそのことを上奏したが、後白河天皇は許し給わず、写本を送り還された。上皇は怒り給ひて曰く、叔姪（叔父と甥）が兵を交え、兄弟が相仇するのは、古より例のあることである。朕は懺悔の為に仏經を親書したのは後生の冥福を祈つてのことであつて今生の爲ではない。しかるに今この書を藏めることさへ許さないのである。そして舌を噛んで血を出し、写本に書して言うには、願わくば大魔王となつて天下を悩亂せん、五部の大乘經は大魔王のいる惡道に回向してお供えしようとのことであつた。

これより髪を剃り爪を剪り給わず、古い御衣を着たまふ長巾を破り、齒を食いしばり、目を瞋らし、いたましい程やせ衰えられ、長寛二年秋八月二十六日、志度に崩ぜられた。享年四十六歳にましました。崇徳上皇崩御の後、乱逆が相繼いだことから世間はこれを以て上皇の御崇りとなし、後白河天皇は勅して春日河原に靈廟を建て、これを粟田宮と称し

て毎年八月奉祀された。(春日河原は保元の合戦時、上皇の御所があった場所である。)

臣愿曰く、其の兄に友にして其の慶を篤うするは、周の以て興る所なり。天の報施、其れ亦明らけし。帝の兄に於ける、惟だ恐らくは之を除くこと亟からず、之を屏くこと遠からざるを。二人相容れざるも亦已に甚だし宜なり、恩、民庶に被らず、赫赫たる廟堂、禍亂を以て所崇に付す。臣、未だ其の説を知らざるなり。

臣潜鋒申し上げます。周の王季が兄大伯に友愛であつたので、それに天が感応して周の慶を篤くなし下された。これは周が興隆した因縁である。従つて天が人倫の厚い処へ冥加の報を施しなされるのは、極めて明らかである。後白河天皇が兄崇徳上皇に対する態度はこれとは大違いで、何とかして一日も早く追い出したい、一里でも遠くに斥けたいという思召しばかりであつた。兄弟が相容れないこと甚しく、天皇は兄に対してもこの様であつたから、その恩恵が万民へ行き渡ろうはずがなかつた。しかるに赫々たる宗廟、朝堂に列座なさる三公(大政大臣、左大臣、右大臣)たちが、天下の禍亂が人倫の変に因ることを知らず、これを幽霊の祟りのせいにしたのは実に浅ましい見識である。

後世の禍源を論ずる者、往往罪を美福門

院に歸す。固より當れり。而して又竊かに聞けり。白河帝色を好んで最も淫なり。待賢門院璋子は鳥羽帝の女御にして、崇徳帝の母なり。白河帝璋子を鍾愛す。其の間、詩の謂ゆる道ふべからざるものあり。鳥羽帝も亦、崇徳は己が子にあらざることを知れり。故に鳥羽の崇徳に不慈なること、婦言の聴に由ると雖も、而も白河の倫を亂ること、實に由つて基する所なりと。

後世、保元の乱根を論じる者は、大方罪を美福門院の長舌に歸す。勿論そうではあるが、また秘かに承ることあり、白河天皇は色を好んで殊の他淫乱であり、(大納言藤原公実の娘)侍賢内院を御養子にして鳥羽天皇に娶し、孫嫁とし給うたが、なれなれしく御寵愛なされて二人の間に穢しくて口外のならぬ事が出来た。かくして御誕生なされたのが崇徳天皇であり、天下では鳥羽の御子とあしらわれたが、実際には、鳥羽天皇の御叔父であられた。こうしたことから、鳥羽天皇が崇徳天皇への御慈愛なく、親しみもなかつたのは、美福門院の賢らを鳥羽天皇が聴き容れ給うたからではあるが、内実は白河天皇が人倫を乱しなされたのが元であつた。

後世、淫情風をなし、牀第修らず、上烝下淫、彝倫を穢するに至らざるは即ち幸のみ。豈に椒塗の範を提げ、彤管の輝を炳はすに足らん。然りと雖も、風化は宮掖に原つき、治

教は閨闈に端す。人君、豈に古今に鑑みて以て、戒むる所を知らざるべけんや。

後世、淫乱なるだらけた事が風俗になり、寢床の行儀が修まらなかつた。されば或は上烝(母など尊貴な婦人と姦通すること)の穢れを犯し、或は下淫(娘など慈しむべき女と姦通すること)の不法法を犯して人倫を汚し乱り、世に先例のない名を流さねば、まだ幸いな方である。どうして内政を嚴にして皇妃女御の御式目を掲げ示して、後宮の手本になり、女官妾女の行跡を炳し耀かして後世までの則になるようなことがあろうか。しかしながら、天下の風俗は後宮の行儀に基き、天下の治教は、夫婦の道義に発端するのであるから、人君たる者、古今のあり様を鑑になされ、白河天皇が乱源をなされたことを戒めとなさるべきである。

冬十月戊午、記録所を復して庶務を参決す。是の歳五畿七道に敕し、大内を造る。冬十月、成つて徒御す。

冬十月二十日、記録所を復活して庶務を決裁された。記録所とは天下の訴訟を聞き召して、理非を決断する所である。後三条天皇が設立し給ひ親政を敷かれたが、その後中絶していたのを信西が復したのであつた。またこの年、五畿七道に勅して内裏を造営された。保元二年冬十月、完成し、後白河天皇が還幸

された。

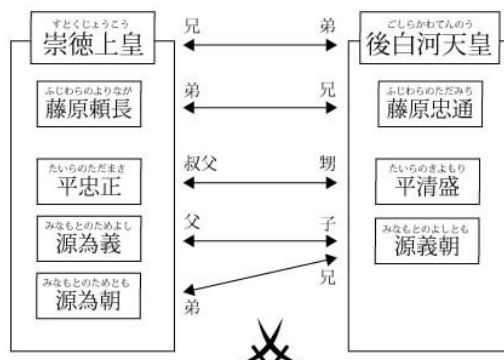
臣愿曰く、凡そ邦家を有つ者、儀制備ると雖も、宮室嚴なりと雖も、而も自修に務めて徳政を強ひること能はざること、譬へば魚の爛れて、外に未だ見えずして内に先づ潰るるが如し。故に神武、日を畏るるの敬あり。而して後以て平定を抵すべし。仁徳、宮を卑くするの儉あり。而して後以て富庶を致すべし。醍醐、御衣を脱するの仁、後三條、北斗を拜するの孝あり。而して後以て格式を制し、升斗を均うし、記録所を置くべし。帝の信西に任ずること、勵治、此の如くにして、變、肘腋に生じ、血、禁署に流る。豈に徳を修めざるの過にあらずや。

臣讚鋒申し上げます。およそ国家を保つ者は、例えば記録所だの天下の学校だのという様な故事法制が備わつていても、内裏宮殿が壯嚴でも、御身を修め給う親切の御工夫なく、徳を以て人を教化する努力を怠るのであれば、例えば、腐った魚が表より見れば、鱗といい尾鰭といい、きちんとして見事であっても、内側の肉はとくに腐り潰れて虫がわき鼻もちならないのと同じことである。故に、古の聖王のなされ方はこれと異なり、神武天皇は、日を畏れる敬みが根本にあつて、天下の乱を平安に定めなされ(日本書記に曰く、神武天皇は日の神の子孫として日に向つて虜を征つのは天道に逆えりとなし給ひ、日の神

の威を背に負い天下を平定された。仁徳天皇は、宮殿に雨が漏り月の光が差し入る様に破れ傾いていたのを、民を労するといつて六年までそのままに差し置かれ、儉約の御徳を積まれてこそ、「民の竈は賑にける」の富を致しなされた。また醍醐天皇は寒夜に御衣を脱ぎなされ、民の困窮を思し召され、御三条天皇は、かつて臣子の身として他日登祚遊ばされることを欲する意があるのを不孝とし、毎月北極星を拝してその罪を謝し給うた。この醍醐天皇の仁愛あつてこそ、聖代として名高い延喜の治も行われ、御三条天皇の孝心あつてこそ、石高を量る升斗を均一にし、記録所を置くなどの施策も役に立ったのである。それが、後白河天皇もまた記録所を置いて政治を聞こし召し、大裏を造営して古に復し給い、信西を信任して政務に励ましめたにもかかわらず、中一年も経たぬ内に、変乱が肘の下より出来て、禁中に血を流す様なことになった。これは皆、法だけが形式的に備つて、真実に徳を修めなされる実がなかったことによる過ちではなかったか。(続)



1156年 保元の乱 関係図



(左)『保元・平治の乱合戦図屏風』「白川殿夜討」

江戸期國體思想の発展においては、ほぼ同時代を生きた三人、山崎闇斎、山鹿素行、水戸光圀(義公)の名を挙げることができる。敬公は、この三人に先立って尊皇思想を唱えた先覚者として位置づけられるのではなからうか。

敬公は、慶長五(一六〇一)年に徳川家康の九男として誕生している。闇斎はその十八年後の元和四(一六一九)年に、素行は元和



「王命に依つて催される事」
——尾張藩の尊皇思想—— 上
(顧問) 坪内隆彦

「幕府何するものぞ」
——義直と家光の微妙な関係——

名古屋城二の丸広場の東南角に、ある石碑がひっそりと建っている。刻まれた文字は、「依王命被催事(王命に依つて催される事)」。この文字こそ、尾張藩初代藩主の徳川義直(敬公)の勤皇精神を示すものである(左)。

八(一六二二)年に、そして義公は寛永五(一六二八)年に誕生している。名古屋市教育局文化課が刊行した『徳川義直公と尾張学』(昭和十八年)には、以下のように書かれている。

「義直教学を簡約していひ表はすと、まづ儒学を以て風教を肅正確立し、礼法節度を正し、さらに敬神崇祖の実を挙げ、国史を尊重し、朝廷を尊び、絶対勤皇の精神に生きることであつた。もつともこの絶対勤皇は時世の関係から当時公然と発表されたものではなく、隠微のうちに伝へ残されたものである」

「隠微のうちに伝へ残されたものである」とはどのような意味なのか。当時、徳川幕府は全盛時代であり、しかも尾張藩は御三家の一つである。公然と「絶対勤皇」を唱えることは、憚れたのである。その意味では、敬公は義公と同様の立場にありながら、尊皇思想を説いたと言つこともできる。

「幕府何するものぞ」という敬公の意識は、第三代徳川將軍家光との微妙な関係によつて増幅されたように見える。

敬公は家光の叔父に当たるが、歳の差は僅か四歳。敬公は「兄弟相和して宗家を盛りたてよ」との家康の遺言を疎かにしたわけではないが、「生まれながらの將軍」を自認し、「尾張家といえども家臣」という態度をとる家光に対して、不満を募らせずにはいらなかった。

寛永十(一六三三)年、家光は病に倒れた。

当時、家光の嫡男家綱が生まれる前だったの
で、万が一のことがあれば、將軍家廢絶の危
機さえ招くことになる。このとき、敬公は不
測の事態に備え、急遽軍勢を率いて江戸に向
かったのである。その途上、幕府から「將
軍快癒」を知らせる手紙が届いたが、敬公は
引き返すことなく、そのままゆくりと江戸
を目指した。ところが、敬公の真意を知らぬ
江戸の幕閣たちは、「尾張殿に謀反の意あり」
と警戒するようになったのである。



徳川義直

翌寛永十一年には、家光が上洛の帰路、尾
張へ立ち寄ることになった。將軍の御成とな
れば、家門の誉れである。敬公は、莫大な費
用と手間をかけて城内の本丸御殿を改修し
た。ところが、家光は急遽予定を変更して、
尾張立ち寄りを取りやめてしまった。これに
より、敬公は面子を潰され、強い不満を抱く

ことになった。敬公は弟の頼宜（後の紀伊家
初代藩主）に鬱憤をぶちまけたが、結局、頼
宜の説得により、忍従せざるを得なかった。

さらに、寛永十九年には、家光の嫡男家綱
（幼名・竹千代）の山王社初詣に際して、敬
公は老中松平伊豆守信綱から「御三家も同行
するように」と内示を受けた。

敬公は「大納言である余が、なぜ無位無官
の竹千代の供をせねばならぬのか」と強く反
発した。伊豆守が必死に説得し、歩行による
随行ではなく、敬公が竹千代に先立って山王
社に至り、そこで迎えることで、ようやく折
り合ったという。

義公の『大日本史』と敬公の感化

敬公の時代にあつては、儒学は幕府公認の
林羅山の朱子学が主流であつた。敬公もまた、
まず羅山から学問の手ほどきを受けた。た
だし、敬公は儒学だけではなく、神道と国史に
ついては羅山から教えを受けている。羅山の
年譜によれば、羅山は敬公の求めに応じて、
神社考詳節・宇多天皇紀略などを作っている。

さらに敬公は、羅山と並ぶ藤原惺窩門の
四天王の一人堀杏庵に学び、早い時期から
神道への関心を深めている。すでに寛永元
（一二二四）年、敬公は杏庵に熱田神宮の官
符を写させ、宝器を検し、大宮司、社僧らと
祭祀の典例を議定させていた。ここで、想起
すべきは、小野耕資氏が「山本七平『現人神
の創作者たち』を通して崎門学を考える」（本

誌第十二号）で指摘している通り、惺窩の
学問が当初は儒学に絞られていたが、やがて
日本の古典や和歌に広がっていったことであ
る。

敬公は寛永七（一六三〇）年には、自ら伊
勢の内外宮に参拝し、林崎文庫（現神宮文庫）
について神道の書数十部を写させている。

やがて敬公は、日本各地の神社の縁起や御
祭神が不明になりつつある状況に歯止めをか
けなければならぬと痛感するようになった。
こうして、『神祇宝典』撰述が開始され
ることになったのである。撰述は、正保三
（二六四六）年二月、敬公四十七歳のときに
完了した。その序文は以下のように書かれて
いる。

〈嗚呼神意人心、本是れ一理、器を以て之
を言へば、劍爾鏡なり、道を以て之を言へば
勇信智なり。爾鏡は文なり、劍は武なり、是
れ日神の皇孫に授けたまふ所以にして、而し
て累世の帝王禪繼即位の時に、則を取る所以
の者、茲に在らざらむや。若し之を拡充すれ
ば、堯舜禹の咨命と雖も、亦た何ぞ之を迫尋
せざらんや、即ち是れ王道なり、儒道なり、
聖賢の道なり。易に云ふ、聖人神道を以て教
へを設け、而して天下服す。是を序と爲す〉
『類聚伝記大日本史 第三卷』（雄山閣、昭
和九年）によると、『神祇宝典』は、まず神
道の大意を説き、本朝は神聖の誕生して棲舎
する所なので神国と称し、その宝を神器と号
し、その大宝を守れば神皇と言ひ、その征伐

は神兵と言ひ、その由つて行ふところは神道
と言ふと説く。神武帝は初めて天神を祭り、
崇神帝は社地神戸を定め、垂仁帝は天照大神
を伊勢に移し崇め、文武帝は令に神祇の位を
定め、醍醐帝に至つて式内式外あり、後朱雀
の長暦中宗廟社稷諸氏祖神を分ち、君臣をし
て斉明盛服の礼を存し、敬遠感格の意を致さ
しむ、聖人の神祇を尊び、祭祀を慎み、人事
を重んずるは本朝漢土皆同じ、と説いている。
『神祇宝典』撰述と並ぶ敬公の功績は、『類
聚日本紀』七十冊を撰したことにある。編
纂に当たつたのは、堀杏庵門下の深田正室、
武野安斎らであつた。その序文は、『神祇宝典』
完成から九カ月後の正保三年十一月に書かれ
ている。

水戸学研究の大家・高須芳次郎は『徳川光
圀』で「尾張敬公の感化」の一節を割いて、
次のように書いている。

〈光圀の敬公に対する誄詞のうちにも「国
史を善説して、廢れたるを興し、絶えたるを
継ぎ、皇道の弛めるを張る」としてあるのを
見ると、両者の関係がよく分る。……義直に
接近して、その指導を受け、啓発するところ
が少くない。殊に義直は『類聚日本紀』を夙
に作つてゐるので、国史編述につき、光圀に
よき示唆を与へたにちがひなかつた。以上の
ことを考へると、光圀の『大日本史』編述の
原因は「伯夷伝」の感激にもあるが、右のや
うな時勢の動きと叔父義直の感化とに、待つ
ところが多かつた事情を認めねばならない〉

立公によって記された

「王命に依って催される事」

敬公はまた、兵法の書『軍書合鑑』を撰していた。その末尾に設けられた一節が「依王命被催事（王命に依って催される事）」であった。ところが、その詳しい内容は歴代の藩主にだけ、口伝で伝えられてきた。その内容を初めて明らかにしたのが、第四代藩主・徳川吉通（立公、一六八九～一七一三年）である。『徳川義直公と尾張学』は次のように書いている。

〈四代吉通といへば、元禄の末から寛永正徳にかけての頃で、幕府の権力の最も強かつたとき、尊皇論はまだ影も見せなかつた頃であるから、……当時としては実に驚くべき絶対勤皇の精神であるが、尾張に於ては夙に義直以来はつきりと伝統し来つたところであつたのである。この内容は歴代藩主から継嗣に口伝されてきたものであつて藩主以外に知る者なかつたのであるが、吉通薨するに臨み、嗣五郎太まだ三歳の幼少であつたため、ここに茂炬に伝へてあとに残したのであるといふ。義直の精神はここ吉通に至つて顕露明白に發揮せられて一藩の指導原理となつたのであり、これを残さしめた吉通の功大なるものありとせざるを得ぬ〉

ここにある「茂炬」とは、吉通の侍臣近松茂炬のことである。茂炬は、吉通の遺訓を筆記し、それを『円覚院様御伝十五ヶ条』に収

めた。

「御意に、源敬公御撰の軍書合鑑巻末に、依王命被催事といふ一箇条あり、但し其の戦術にはそしてこれと思ふ事は記されず、疎略なる事なり、然れどもこれは此の題目に心をつくべき事ぞ、其の仔細は、当時一天下の武士は皆公方家を主君の如くにあがめかしづくども、実は左にあらず。既に大名にも国大名といふは、小身にても公方の家来あいしらひにてなし、又御普代大名は全く御家来なり、三家の者は全く公方の家来にてなし、今日の位官は朝廷より任じ下され、従三位中納言源朝臣と称するからは、是れ朝廷の臣なり、然れば水戸の西山殿（光圀）は、我等が主君は今上皇帝なり、公方は旗頭なりと宣ひし由、然ればいかなる不測の変ありて、保元・平治・承久・元弘の如き事出来て、官兵を催さるゝ事ある時は、いつとても官軍に属すべし、一門の好を思ふて、仮にも朝廷に向うて弓を引く事ある可からず、此一大事を子孫に御伝へ被成たき思召にて、此一箇条を巻尾に御記し遺されたりと思ふぞ」

立公が遺訓を記録させたのは、五郎太が幼少だったことがきっかけではあった。しかし、立公には尾張尊皇思想を顕現せんとする明確な志があつたのではあるまいか。

立公は、敬公の尊皇思想を継承するとともに、自ら学問を深めていた。彼が学問を学んだ一人が、崎門派の吉見幸和（一六七三～一七六一年）である。

吉見家は、代々名古屋東照宮の祠官であり、立公の時代には尾張藩の多くの名流が吉見の門を叩いたという。吉見の『学規の大綱』の第一条には、へ一、神道は我国天皇の道、尊敬せずんばあるべからず。開闢以来、神聖治国の功勞を以て、君臣の道嚴に、祭政の法正しき事、国史官牒を以て事実を考るもの、国学の先務たり。俗学の輩、正偽を弁せずして、偽書妄撰の造言を信じ、偽作の神託、自作の古語、付会天妄の説をまじへ説く者ゆべからざる事」とある。

彼が力を尽くした著作の一つが『神道五部書説弁』であつた。しかし、彼の考証重視の姿勢には弊害もあつたのではなからうか。近藤啓吾先生は、「大山爲起著『倭姫命世記』櫛葉抄」（『続々山崎闇斎の研究』所収）で、次のように指摘している。

『倭姫命世記』の調査、そして解釈は、この後、垂加の学者や伊勢の神道家の間に盛大となる。しかしそれは、調査が進むにつれて次第に考証の面が強くなり、つひに元文元年成立の吉見幸和の『五部書説弁』や、文化七年具稿の伴信友の『倭姫命世記私考』の出現となり、『世記』の本文はずたに切断せられてその各条の原拠と綴合の実体が明らかにせられ、同書成立の事情も推察せられるに至つたが、同時に嘗ての『世記』に対する尊崇も一時に減衰し、そのみでなく、神道そのものが、信仰としてでなく考証考古の対象として考へられるやうになり、合理実証のみ

が学問であるとする弊が生じて来た」

吉見の学問には、こうした問題もあつたが、彼の門人の中からは尾張藩の尊皇思想発展に貢献する人物が出たことも否定し難い。『円覚院様御伝十五ヶ条』を筆記した茂炬もまた、吉見の門人である。

小出侗斎に始まる尾張崎門学

すでに、尾張崎門学は、第二代藩主・光友の時代に、浅見綱斎門下の小出侗斎（二六六～一七三八年）によって始まつていた。吉見は、侗斎の門下でもある。また、侗斎に師事した須賀精斎の門人堀尾秀斎は、垂加神道を玉木葦斎に学び、尾張垂加神道の祖となつた。秀斎が著したのが『名分大義説』である。

『円覚院様御伝十五ヶ条』には、秀斎の『名分大義説』も収められている。例言には「円覚院様御伝十五ヶ条、並に名分大義説は、孰れも尾張藩に於ける勤王説の濫觴と目すべきものにして、維新の当時徳川慶勝卿の勤王は実に前者に啓発せられるところ多しと伝へらる。後者は、又名古屋に於ける崎門派の勤王説を尤も明瞭に発表したるものといふべし」と記されている。

立公の幼少時代、それを薫陶補佐したのが、敬公の孫に当たる美濃高須の藩祖松平義行であつた。義行が師事していたのが、天野信景（一六六三～一七三三年）である。信景は、伊勢神道の再興者・度会延佳に学び、さ

攻の研究者であつたことも、本書を紐解く上で大きな関心を惹く。

そんな市井が幕末の時代に心を惹かれるやうになつたのは、本書執筆の十三年前、愛知教育大学に勤務するやうになつた際、田原の地で渡辺崋山の遺跡を目にしたことが契機となつてゐる。

崋山の遺体は自決した後、江戸から検屍の役人が来るまでの間、塩漬けにされてゐたといふ。その素焼きの甕を目にしたとき、「百数十年の時間のへだたりをとびこえて、その時代と人とが急激に」著者の心をとらへたといふ。

「どのように辛苦にみちた努力が積み重なることによつて、『御一新』（あるいは『維新』）という変革が自力で成就することになつたか」。――当時の人々の内面に肉迫することと追求しようとしたのが本書の目論見である。

「歴史の進歩とは何か」と題された第一章で、六〇年反安保闘争の挫折体験を振り返り、江戸時代の百姓一揆や打ちこわし運動に遡つていく書き起こしも、昭和四十年代当時の執筆状況が生々しく反映されてゐる。

それらの闘争の歴史から、著者は「無数の人々の長年月にわたる血と汗にささえられた明治維新も、指向された理念を完全に実現することできませんでした」と概括するが、それは明治維新に限つたことではない。本書でも言及された英国の清教徒革命、フランス革命など、古今東西、あらゆる時代、地域の変

革や革命においても例外ではない。

「……歴史の逆説に悩まされながらも、日本に自力で歴史の突破口を開こうとした――そして多くは斃れざるをえなかつた――祖先たちの努力を、現代における歴史の進歩のためにこそ、ふり返つてみよう」といふ問題提起は、日本独自の歴史変革ともいふべき明治維新を、著者がこれまで培つてきた西洋哲学の知見を以て総括していかうといふ、歴史学に留まらない普遍的な問題意識を感じさせる。

中でも第二章において、「一世紀前の先駆者」として明和事件の山県大武を取り上げたことは注目に値しよう。

その中でも著者は、大武の妻が大一揆のあつた上州のある村の庄屋の娘であり、かつ一門の中には上州小幡藩家老・吉田玄蕃以下の藩士が多数存在したことに着目する。

彼が明治維新より百年早い宝暦九年といふ段階で、幕府打倒を呼びかける『柳子新論』を著すことができたのも、小幡藩の大一揆の情報をはじめ、かうした幕藩体制に対する民衆の不満の動きを早くから察してゐたことと無縁ではあるまい。

武士のみの力による江戸城攻撃の限界を悟つた大武は、奇兵隊よりもさらに早い時期に「農兵論」を構想するに至る。

宝暦九年には竹内式部の宝暦事件が起こるが、大武が朝権回復を志した式部との連携を図らうとしたのも、式部門人で播州浅野家に仕へた藤井右門が、山県塾師範代として住み

込んでゐた事実が大きい。

また大武が甲府や江戸に建てた碑文を通して、日本武尊をはじめとする記紀の英雄たちの顕彰に努めた点についても、市井は「幕府否定に通じるような古代史讃美の碑文を庶民に読ませることによつて、民衆意識の啓蒙にも心をくだいた」と見て、高く評価してゐる。

さらに「くもるとも何かうらみん月こよひはれを待つべき身にしあらねば」の辞世から、「長い徳川時代のあいだに、処刑まぎわになつてもとり乱さず、その態度のみごとさが獄吏をも感銘させた死刑囚はたった二名」とし、後年の吉田松陰と並び称させてゐる。

大武以前に「日本古代を美化する思想家」として、市井が挙げてゐるのは山崎闇斎である。闇斎学派について市井は、水戸学とともに「記紀に描かれた日本の神国思想と朱子学を合体させたもの」と分析するが、大武には「天皇政治をよしとするかという理由づけを、

「天皇政治をよしとするか」といふ理由づけを、たんなる神話や民族信仰にもとめないで、当時としてはじつに合理的な政治理論に展開していた」と概括する。その辺りは、元々合理主義を理念とする西洋哲学者ならではの視点もあるが、闇斎学派の中でも、とりわけ現代にもつながる先見性をもつた大武の独自の位置づけすら試みられてゐる。

具体的には、第一に「かれが儒学者や兵学者であるほかに、天文学や医学という領域でも一家をなし、法則性や実証性重んずる科学的心性をもつた人物であつたこと」、また

同時に荻生徂徠の始めた古学派の影響があつたことも、指摘してゐる。ただし大陸文化を賛美し、幕府権力を肯定してゐた徂徠派は、むしろ大武の『柳子新論』の思想とは対極にあるといつていい。

さらに徂徠派が放伐論を江戸幕府の正当性のために利用したのに対し、大武はそれとは逆に「王道理念に反する幕府体制を、武力で倒すことの正当性」を求めてゐる。

果たしてそれが市井のいふように、「人民主義」や「軍国主義の否定」に繋がるものであるかどうかは検討を要するが、日本思想史家とは分野を異にした西洋哲学者が、戦後二十数年といふ時期にあつて、江戸時代における大武の思想家、実践家としての独自の地位を見出した功績は決して小さくはない。

第三章「幕府の衰退と人民の抵抗」では、十八世紀に入つてから増えていつた農民一揆を概括。とりわけ宝暦四年の久留米藩での全藩一揆は、二百七カ村の農民が連携をとつた大規模なもので、彼らにしてみても武士や学者、医師や僧侶といった知識階級の力を必要としたことに同時に着目。

とりわけ十九世紀に入り、外国船の接近が度重なると、知識人たちの間にも「ナショナルな問題意識」の覚醒が芽生え始める様になる。

まさに岡倉天心が『東洋の目覚め』で分析した古学派、陽明学派、国学派の三つの別々の思想の合一が、維新につながる日本更生の

起因となつていくのである。とりわけ本章では、「蚕社の獄」という結果をひき起こした洋学派の抵抗」として、渡辺崋山といふ経世家の言動に目を注ぐ。

一方、第四章の「国民国家への幕政改革」では、水野忠邦の天保の改革の失敗に学びつつ、「より明確に統一国家化への開明路線をおし進めた」阿部正弘を公平に評価。つまり幕府の体制側にも現実的に即した改革を推進させることで、開国への道を拓いていった知見があつたことにも目を配つてゐる。

ところがさうした正弘による挙国体制への努力を快しとせず、「反撃の機をねらつていた守旧勢力の代表として登場した」人物がある。井伊直弼である。第五章「外国条約と安政の大獄」では、「弾圧まで加えて勅許をとつたことが、無意味であるばかりではなく、まさに逆効果しか生まない」と辛辣に批判。「幕藩体制を存続させたまま、時代の変化にこたへるという可能性それ自体を、政治的にはほとんど封じてしまふ」といふやうに、井伊大老の強権が、幕府側にとつても負の側面しか生まなかつたといふ実態を摘出してゐる。

そして第六章「御一新の思想的源泉」において、「観念の世界において、幕藩体制そのものを倒さねばならぬ、という方向に思想転換をとげる人間」として登場するのが、吉田松陰である。

ここに百年もの歳月を経て、山県大弐の思想が継承されるわけだが、『柳子新論』が松

陰の手にわたるまでには、蒲生君平、黙霽といった人物が媒介となつたことも見落としてはない。その間に水戸学への同調と訣別、「二君万民」思想の純化、さらには開国論と両立する自覚的攘夷論を明らかにし、水戸学の「信仰的攘夷論」を超えた松陰の「討幕による新体制の指向」が、松下村塾の門下生へと引き継がれていく経緯が丹念に辿られてゐる。

第七章と第八章では、さうした松陰の「自覚的攘夷」を受け継いだ長州の久坂玄瑞、桂小五郎、高杉晋作、それとは別に国学的な討幕論を独自に打ち出した真木和泉守の実践を追跡。幕府における開明路線、藩内の公武合衆論との綱引きを繰り返しながら、やがて禁門の変以来、敵対してゐた薩摩と長州が外国勢力と戦ひ、敗れ、同盟を結ぶことによつて、自覚的攘夷思想が、討幕思想にまで発展していく過程が理解できる。

数々の紆余曲折を経て、愈々王政復古に結実していくわけだが、第九章「御一新の成就と維新の明暗」では、その光とともに敢へて影の部分にも目を向ける。

明治維新について市井は、『「二君万民」というイデオロギーによつて、何百年にわたる封建的身分差別を、いつきよに撤廃する手がうたれたことはみごとといわざるをえない』とし、称賛を惜しまない。ところが「その天皇に政治大権が復帰したあとでは、同じ思想が専制政治の源泉へと転化する」といった

負の側面も強調してゐる。同時に「…アジアに対して明治の国家権力―人民と区別した意味での―そのものが、西洋の帝国主義と同じ態度をとるにいたつた」点も見逃さない。

もちろんさうした分析にも留保が必要だらう。吉田松陰の富国強兵論にしても、「…これのいうアジア諸地域への進出が、外面的には似てくるとはいえ、けつして西洋と同じ帝国主義政策をとるためではなく、アジアとともに対西洋の共同防衛をするためである」ことも著者ははつきり認めてゐるし、明治六年の西郷隆盛の「征韓論」にせよ、松陰の考へに近いことも諸資料を通じて十分認知はしてゐる。

この辺りについては、市井自身「…かつての変革の志士たちは、変革が成つて権力をにぎつたのちはみずからが、アジアに対する西洋列強の地位に仲間入り」していき、かつ「松陰の初心は在野の志士たちにだけ、受けつがれてゆく」と述べてゐるが、後の自由民権運動から国会開設に向けての動きによつて明確になつた「国権」対「民権」の対立、もしくは新政府が自衛のために推し進めていつた富国強兵策が、民間の大陸浪人らによるアジア主義の理念と背離していく経緯を確かめる上でも興味深い。

さうした「御一新」の理念との齟齬から生み出された自立的な国民運動を実践した象徴的な人物として、豊前中津藩の増田宋太郎を挙げたことは、本書全体の流れを総括する上

でも、実に意を得た構成となつてゐる。

戦後日本の高度成長只中に上梓された本書に一貫して流れてゐるのは歴史的な変革を通じての「人類の進歩」に対する、今日から観て過大ともいふべき信頼である。

しかしながら、かうした「進歩」や「変革」の理念が、明治維新よりも百年早く「二君万民」の理念を掲げて挫折していつた山県大弐をはじめ、崎門学派の思想と相対立するものではないことに、「明治百年」からさらに半世紀を経た今日、改めて驚かされる。

明治維新の源流として崎門派の思想家たちのいち早い朝権回復の理念と討幕の思想があつたことは疑ひない。しかしながら、さうした動きが実際に維新変革の現実へと結実していくためには、国際的な外圧とともに、幕藩体制内部からの瓦解、経世家たちの警鐘、民衆の覚醒…といった様々に複合した動きが入り乱れて、展開していつたのも事実である。

歴史を動かす原動力とは何か。一つの思想の深化・発展が、相対立する全く別の思想とともに入り乱れ、時には後退し、挫折を繰り返しながらも、さうした綱引きによつて思ひがけない展開を示していく実例を、本書は改めて教へてくれる。

平泉澄の歴史観

小野耕資

平泉澄という人物

平泉澄は明治二十八年に福井県大野郡平泉寺村に生まれた。平泉寺白山神社宮司の家柄である。東京帝国大学文科大学国史学科に進学し、その後大学院を経て東京帝国大学教授となった、国史学を代表する人物である。平泉は若い頃は実証的な学風のもと歴史学を行っていたが、その根底には国粹主義的志向があった。その後、年齢を重ねるにつれて平泉の史論は国粹主義的志向が前面に出るようになり、皇国史観とも呼ばれることとなった。

平泉澄の歴史観

平泉の国粹主義的傾向は哲学的、存在論的次元にまで届いていた。平泉にとって歴史は「人がなぜ生きるのか」という問いに答えるものであった。

それがわかるのが大正十四年に発表した「我が歴史観」という論文である。まず平泉は、

今日文化なる語の流行して盛に用ゐらるゝにも拘はらず、その概念は人によつて異り、極めて多趣多様である様に、歴史なる語の意義も頗る複雑であり、殊に近代に於ける歴史観は、その思想界の混乱錯雑の縮図とさへ見

らるゝ程、多様の内容・範囲・傾向をもつてゐる。

との言葉から始めている。「文化」や「歴史」という言葉の意味自体が思想の混乱によりさまざまなものを持ちいささかも統一されていないことを嘆いている。ただしこれを統一することは「浅学予の如きものゝよくせざる所」であるという。

ここで話は西洋の史学史に飛ぶ。古来政治史のみであった歴史だが、近代では多方面に発展を遂げたとして、英雄史観を挙げた。

「古くは個人の力を極めて重大視し、偉人英雄を崇拜し、歴史はそれら英雄の伝記に外ならない観があつた」が、年とともに「民衆の力」「時代の大勢」を重要視するようになったという。歴史におけるこのような変化は一般社会における「デモクラシー」の流行と関係があると強調する。民衆、時代の力を重んじるようになったのは唯物史観的思想に導かれたからだとする。これにより「政治上の偉人、宗教上の聖人、思想上の哲人も、すべて経済上の諸条件の奴隷たるに過ぎない」ことになってしまったという。

また経済関係だけではなく土地、気候の民族に及ぼす影響ということが語られることにより歴史上の問題は「遺伝と地理」によって説明可能だという思想が唱えられることとなった。

さらに文明史、文化史の研究において社会

心理学的な考察が加えられ集団の状況が過重視され、歴史を進める原動力は社会状況にある個人にないかのように見なされた。

わが国ではこのような西洋史学史の状況を取り入れることに熱心であつたが、そこに充分の思索がなかったため一層混乱する事態となった。

ここで平泉は「歴史の始め」について考えてみようという。つまり、歴史はいつ始まったのかということである。歴史家によつては歴史に「始め」なんてものはないというだろうと想定する。研究法が特別であるがゆえに先史学、人類学にゆだねているだけだという考えがあることを指摘する。

それに対し平泉はこう反論する。歴史に始めがないのだとすればいかなる人間にも歴史はあるのか、もしくは人間だけでなく山の歴史、地球の歴史というものはあるのか。その上で「人格」こそが歴史と非歴史を分ける要素だと主張した。「人格」がないものは人の形はしていても他の動物と変わることはないとした。

この認識を踏まえううえで、英雄が歴史を動かしたという史論を否定して「遺伝と環境」を重視している昨今の歴史観に疑問符をつける。つまり「遺伝と環境」だけで歴史が決まるのであればそこに「人格」はないではないかということである。

わたしが思うに、「人格」を重んじる平泉の歴史観は大正教養主義の空気を存分に吸っ

ている。俗に昭和の右翼といわれる思想は大正時代にはやつた外国思想を存分に吸収したうえでそこに不満を覚え日本に帰着するという道筋があつた。平泉もその例外ではない。

平泉はそれだけではなく研究方法にも厄介な問題があるという。歴史を自然科学のように扱うことへの不満である。コントの実証論を援用し歴史学は「絶対的原理」や「究竟的目的」を認めず、ただ事実を確認することを任務としている。しかし歴史は「特殊的事実」を求めるものだ、と反論する。人格が主であり経済関係などはあくまで従にすぎない。個人なくして民衆はない。そして社会は有機体であるから社会から遊離したところに個人があるわけでもないとした。

わたしが思うに現代においても「実証史学」なるものが歴史界を完全に支配しているが、実証史学の致命的欠陥は実証しようとするほど事象が細分化されてしまうことである。つまり「目的を認めず事実を確認」しようとするどこまでも細分化していき、結局包括的な歴史が存在しなくなってしまうのである。細かく分けても世界が見えてくるわけではない。むしろ細かく分ければ分けるほど世界は見えなくなるのではないだろうか。

平泉は歴史家の態度についても論じている。

平泉は、歴史家は過去に起こった出来事そのまま考察叙述しなければならぬと思ひ込んでゐるがそんなことが可能なかと問

う。無論そんなことできるはずがない。一日の出来事を本当にそのまま叙述するとしたらそれは起きてから寝るまでをそのまま記さねばならないことになるからだ。

歴史は認識であり、対象は認識の主体によりさまざまに変化する。史家が何を問題としているか、全体として何をつかんでいるかが極めて重要なことなのである。つまり大事なのは史家の「人格」なのである。

平泉は以上のように主張してこの論文を終えている。まさにわたしの考えと同様の部分である。純粋に客観の歴史などというものはない。いや、純粋に客観的な科学というものもありえない。歴史は「歴史家がどう過去を見るか」が重要なのであって、歴史によって過去の実態を明らかにすることは目的ではない。したがって歴史に「真実」も「客観性」も最重要の課題ではない。重要なことはわれわれが過去をどう見なすか、そしてそこから何を吸収するかなのである。これらの議論は説得力を持って響くが、一方で平泉の歴史哲学は土地や気候などの影響などに対し少し冷淡すぎるのではないかという印象も受ける。

こうした平泉の歴史観は終生維持されることとなった。

例えば『国史学の骨髄』は極めて印象的な一節から書き起こされている。曰く、「歴史があるのは単なる時間的経過があるのではない。歴史は高い精神作用の所産であり、人格があつて初めて存在し、自覚があつて初めて

生じるものだ。志を立てたとき、その人にとって歴史が始まるのであって、志をもたない人間にとって歴史はただの背景でしかない。醉生夢死の徒輩、つまり何の自覚もなく享樂的な日々を送る者は歴史と無縁の連中なのだ」と述べている。厳しい言葉であり、我々の人生に刃を突きつけるような一節であるが、非常に的確に人生を言い当てている言葉と言えよう。

また、平泉は『山彦』で次のように言う。

戦後社会の動搖、人心の不安、今に至つておさまらぬは、けだし過去との連鎖を絶ち、父祖の歴史を忘却した所に、その根本の原因があるのであらう。

およそ社会は、これを現在の相においてのみ見てはならぬ。死者もまたその構成分子であり、発言権を有するものである。それら先人の温情を体認して、初めて正しい道を歩むこともでき、歴史に参じてこそ、真に文化に貢献することもできるのである。

平泉は無論共同体を重視する考えだが、それ以上に英雄の存在を重視する。それは歴史を学ぶことで、人格の錬磨につながる、あるいはつなげなくてはならないという態度からくるものだ。それこそが平泉史学の特徴である。それに比べれば、実証史学など史料の発掘と考証にのみ力点が置かれる訓詁学に過ぎないと考えた。



平泉澄

人格主義の主張

こうした人格尊重の姿勢は己さえよければという利己主義からは遠かった。忠義といった大義に命を懸ける英雄に学ぶことで共同体に参与する人物像を描いたのだ。人格、祖先、郷土を愛する心が一本につながる世界観を歴史に見たのである。

平泉は中世史の研究者であつたが、中世への評価は低かった。古代の輝かしい文化が一部僅かに残存しているものの、野蛮な武士たちが跋扈し、現世を離れた浄土信仰にうつつを抜かしていた頹廢的な世界として中世を捉えた。それは平泉が捉えた近代の状況と二重写しになつていたのである。

平泉が「日本は万世一系の天皇が統治する国であり、そのあるべき姿は天皇親政である」と主張したのはこうした背景があつた。日本人が天皇の臣民として絶対の忠誠を尽くすべきなのは、それこそが人格を磨いた末に取る「あるべき」姿であるからであつた。平泉はこうした自らの理論の先駆を崎門学や南朝の忠臣などに求めた。

一方平泉は実証主義的な歴史学を批判していたが、どこか合理主義的なところがあつた。例えばその史論において神代があまり出てこないのもその一つである。ある程度文献で証明可能な建武中興の忠臣などを論じることが多かった。こうした合理的な史論は、日本のものであればなんでも素晴らしいというような浅薄な美化からも距離を置くこととなつた。

大正教養主義の人格主義がコスモポリタンのであつたのに対して、平泉史学は反コスモポリタニズムで、「日本人として」「日本精神を体現した」人物こそ理想としたのである。

こうした人格主義は思わぬところに影響を及ぼした。例えば谷秦山は土佐の山野の庶民の祭りに注目し、京都でも忘れられた神道の姿があるのではないかと主張し、村々の慣習にも注目していた。しかし平泉はそうした動きにはあまり関心を示さず、忠臣をひたすら顕彰することに力点が置かれた。もちろん平泉の時代は秦山の時代以上に古礼が失われていたから、単純比較は平泉に酷である。だが平泉がこうした民間伝承に冷淡であつたことは有名で、中村吉治が平泉に「百姓の歴史をやりたい」と言つたら、「百姓に歴史がありませんか」と言われたというエピソードは有名である。もつともこのエピソードはかなり悪意を持って伝えられているので割り引いて考える必要があるが、いずれにしても平泉があえて民衆の歴史、習

俗の研究を捨てて（初期の著作には一部こうした研究も見られた）忠臣の顕彰に奔ったのはこれまで述べてきた平泉の思想的特徴から来るものであった。民間習俗の掘り起こしはむしろ柳田国男の民俗学や、伊東多三郎の『草莽の国学』に道を譲ることになる。柳田国男が平泉を嫌っていたこともまた有名である。

平泉は中世の社寺が一種の「アジール」の役割を果たしたという、日本におけるアジール研究の先駆者であった。しかし前記のような事情がありこうした若きときに主張されたアジール研究はその後深められることはなかったのである。

まとめ

これまで見てきたように平泉史学の根底には人格主義への強い傾倒があった。それは大正教養主義から学んだものであったが、大正教養主義とは異なつてコスモポリタン傾向を捨象し「天皇への忠義」「日本精神」に帰一しようという狙いがあった。

国史はそうした「天皇への忠義」「日本精神」を錬磨するための手段であり、そうした観点から実証史学は批判された。こうした実証史学批判には聞くべきものがあると思われる。

一方でそうした人格主義は思わぬ負の側面ももたらした。それは元来平泉のような立場であれば当然関心を示してもよさそうな、神道的古礼

や古き良き民間伝承への冷淡な態度である。もつともそれは前記の人格主義を作り上げていく中で捨てていかなければならなかったものであった。

平泉は戦後も精力的に言論活動を続け、故郷と東京を往復する生活を続けていたが、最晩年はある種の絶望を感じ、平泉寺に還ることとなった。（昭和）三十年の初めまでは、伝統は強く残つてゐたが、この清純の気風は、所得倍増の掛声によつて次第に薄らいで行つた。人々の好意友情は感謝に堪へないものの、所詮戦後の世の中は、私と相容れざるもの、東京滞留が二十年に及んだのが寧ろ不思議であつた」（『家内の想出』）。

平泉は魑魅魍魎の跋扈する暗黒社会からの避難所として、再びアジールに還つていったことになる。果たしてこの時如何なる気持ちであつたのだろうか。

大亜細亞

第六号 平成三十年七月



- ◆権藤成卿の思想をいま顧みよ
- ◆大東亜会議と日本民族の大使命
- ◆再び我々はアジアに背を向けるのか
- ◆小山 俊樹教授
- ◆「西洋列強との協調と相克の近現代史」

greaterasia

小野氏が代表を務める大アジア研究会の機関紙『大亜細亞』好評刊行中

『若林強齋先生大学講義』を拜読して④

三浦夏南

今回は前回に続き、程子の言葉についての先生の解説を詳しく見て行くこととする。繰り返しにはなるが、再び程子の言葉を掲載する。

子、程子曰、大學、孔氏之遺書、而初學入德之門也。於今可見古人爲學次第者、獨賴此篇之存、而論・孟次之。學者必由是而學焉、則庶乎其不差矣。

子、程子曰く、大學は孔氏の遺書にして、初學徳に入るの門なり。今に於て古人の學を爲むる次第を見る可き者は、獨り此の篇の存するに賴りて、論・孟之に次ぐ。學者必ず是に由りて學べば、則ち其の差むざるに庶からん。

今回は「孔氏之遺書」の件まで進んだので、今回は「初學入徳之門」より始める。初學とは何か、「初學」と言うは昨今初心の學者と言うことではない。そもそも學に志ありて取りかかる者は皆初學ぞ。」と先生が言われるように、始めて古典を開き、學問を始めた初心者という意味ではなく、道を求め學に志す有志は皆初學であるという意味である。「十有五にして學に志す。」と論語にあるが、こ

と意味合いに近い。孔子は十五にして初めて學問をされたのではなく、學問はそれ以前から積んで来られたが、求道を一生の志として明確に定められた時を十五と言われたのである。

「學」と言うは道を學ぶことじゃが、何ほど道を知り行つても、考えたり、意でかかえたりする中は徳とは言われぬぞ。徳は得ということ、知も眞実に知つて身の物となり、行も眞実に身の物となつて行ふでなければ徳と言われぬ。親に向かつては親、夫婦の間では別、朋友の交わりでは信、各さし向かう当たり前の筋目は道で、道の我が身の物となつて得てくるから言へば徳と言うぞ。だいたい人は道なりに生れ得ておる徳なれどもその生まれつき本法なに行かぬ。その行かぬを生まれつき本法の道なりになるようにするが學で、子たる身からは孝の道を學び、臣たる身からは忠の道を學んで行けば、次第次第に我が身が道なり本法になつてくる。その本法の場合踏み込み踏み込みしてゆくを入徳と言うぞ。入ると言うは本人は明徳固有の者なれども、氣凜人欲のくらみで、子でありながら不孝に、臣でありながら不忠なれば、固有の徳の郭を外れておると言うもの故に、學んで道なりになつてゆくを入徳というぞ。」

先生が「道」「徳」「學」の意味について詳しく説明されている重要な箇所である。道と

は君に忠、親に孝といった人として踏み行へべき人倫規範であり、儒教に於ては三綱五常と言われる。徳とは得ということで、道が自らの血肉となって体得されている状態を指す。単に道を知り、実践をするだけでは徳とは言えないのである。先生も考えて行うようでは徳とは言えぬと明確に言っておられる。つまり理論と実践によって道を行っている状態では徳があるとは言えず、知識が信念となり、自ずから道を踏み行う人間にならなければ、徳を得たとは言えないのである。一般的に儒教は倫理によって人を縛る堅苦しい封建道徳であるかのように誤認されているが、実際はもつと生命的に人間を考えていることが分かる。我が国でいうところの「惟神」になつていなければ、「徳」ではないのである。人は明德を本来所有して居ながら、道を忘れ、徳を隠してしまっている。それを本来の人へと正していくものが「学」である。これは先生が繰り返し論されることであるが、道も知らず、徳も持たない人間が少しづつ学んで明德を得て行くのではなく、本来的に道を知り明德を持つ者が、それを明らかにして行く過程を学と呼ぶのである。人は本質的には絶対善であり、悪は相対的なものに過ぎないという認識が根底にある。人は本来善であるという意識は我が国に於てはシナにもまして強く、人間を「ひと」と呼び「みこと」と呼んできたことから明かである。

「学に入るにはここから入れ、ここでないければ入る処はないと家に入る門の明けてある如く、徳に入るの門分明にしてあるが此の大学ぞ。」

そこで次に大切になってくるのが「門」である。如何に道を知り、其れを体得して有徳者を志したとしてもその方法が明確でなければ、何者になるか分からない。聖人を目指したところが大悪人となってしまうかもしれない。世に邪教と呼ばれるものも人を正し、世を改むる大志から見れば素晴らしいが、その方法を古に求めず、道に至る筋を間違えたところから大きな罪惡を生み出すこととなる。道を知り、徳に入るにはその「門」を知る事が極めて大切なのである。ここが朱子学、延いては崎門学の実践的なところであり、志をもつものにとつて有難いところである。如何に道の莊嚴なるを知り、徳の偉大なるを悟つたところで、そこに至る術を知らなければ、全てが無面目となる。聖人の天性の才覚によつてのみ辿ることのできる道であれば、それは凡夫にとつては無縁のものとならざるを得ない。聖人とは過去にのみ存在した理想であり、届くことの無い夢に過ぎなくなる。しかしながら先生が強く言われるように、徳とは我々人間が本来的に具有するものであり、万人が生まれながらに所有するところのものである。後はそのことを深く自覚し、古人の残した正しい学びの筋を知り、積み重ねて行

けば、如何なる人間も聖人に近づくことができる。その学びの正しい筋道こそこの大学なのである。さらに重ねて先生はこう言われる。

「義理の粗いと言うは褒美することではなけれども、これは年月を積んで勉めたらば、自ずから精しうなるはずじゃが、夫れはともあれ、先ずこの大学より外に学の仕方はないと言うことを得とのみこんだ学者でなければ、学の道筋を知らぬ学故、いかように踏み違ふも計り難い。ここが尤も大切な処ぞ。」

道の事を詳しく知らず、体得していないということは褒められたことではないけれども、それは年月を重ねれば、自ずからに解決する。それよりも正しい学の方法を知らないことが一番の問題であり、正しい方法に従わなければ、如何に厳しい修行を行うとも、如何なる年月を重ねようとも無意味となるのである。単に高い志と激しい意気によつて道を求めるのではなく、その方法論まで精細に考え、現実に道を体得する為に低いところから高いところへと着実に積み上げて行くのが崎門学である。

次号は「於今可見古人爲學次第者」の件より続けたいと思う。此の辺りは大学の核心を先生がまとめて解説されているところなので、詳しく見て行きたい。

活動報告

平成三十年六月三日

第十六回『保建大記』を読む会を開催

平成三十年七月一日

第十七回『保建大記』を読む会を開催

平成三十年八月五日

上州太田に赴き、新田義貞、高山彦九郎ゆかりの地を訪ねるツアーを開催しました。

当日は東武線太田駅に集合し、一般参加二名を含む総勢七名が参加しました。気温は四十度近い猛暑でしたが、汗だくになりながら以下の地を廻りました。道中は車で移動しました。

- ① 太田駅前立つ新田義貞銅像(左)、隣は弟の脇屋義助



②新田神社。 金山城跡を越えた山頂にある。金山城は戦国時代まで新田氏の子孫である岩松氏の居城であった。



新田神社（左右）



③高山神社。 平成二十六年の放火事件で全焼して跡形もなかった。



④風神やきそばで昼食

⑤高山彦九郎記念館（左）。また、付近にある高山遺髪塚と旧宅跡を参拝。遺髪塚は、

高山家の本家である蓮沼家の共同墓地の一隅にあった。旧宅跡は跡形もなかった。



高山彦九郎像（右）
彦九郎遺髪塚（上・左）



高山彦九郎邸趾

⑥新田荘歴史資料館。館内では、新田宗家滅亡の後、新田姓を名乗った岩松氏が描いた新田猫の特別展示も拝観。岩松氏は、新田氏二代義兼の娘と足利氏二代義満の子義純との間の子時兼が初代。



新田荘歴史資料館



新田家伝来の鎧

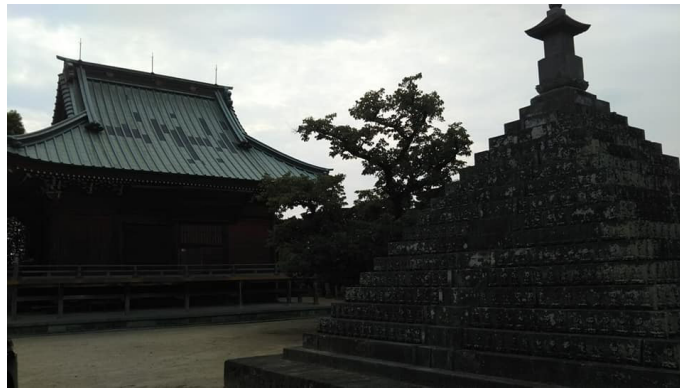


長楽寺の太鼓門



世良田東照宮

⑦世良田東照宮、長楽寺。長楽寺は、新田家初代の義重の子である得川（世良田）義季が開いた。後に徳川家康がその子孫を自称し、得川を嘉字である徳川に改めたとされる。東照宮は、長楽寺の住職であった天海僧正の発願により日光東照宮から勧請され、明治八年の神仏分離令で独立。



明王院

⑧明王院。境内の不動堂には、新田義貞鎌倉攻めの際、山伏に化身して越後方面の新田一族にそのことを触れ回ったとされる「新田触不動」を安置する。義貞居住説が有力。



生品神社

⑨生品神社。新田義貞が挙兵した場所。



反町館の堀



反町館跡

⑩反町館跡。新田義貞が館を築き、大館氏明が住んだとされ、義貞居館説もある。

安倍首相に 種子法に関する要望書を提出

平成三十年七月二十六日、内閣府に赴き、安倍首相宛に種子法に関する要望書を提出した。

以下に要望書の全文を掲載する（賛同者の連名は五十音順とした）。

「種子法（主要農作物種子法）廃止に抗議し、同法復活と併せて必要な施策を求める要望書」

今年（平成三十年）四月、安倍内閣によって種子法（主要農作物種子法）が廃止された。この種子法は、米麦大豆などの主要農作物の種子の生産と普及を国と県が主体になって行うことを義務付けた法律である。この法律のもとで、これまで国が地方交付税等の予算措置を講じ、県が種子生産ほ場の指定、生産物審査、原種及び原原種の生産、優良品種の指定などを行うことによって、良質な農作物の安価で安定的な供給に寄与してきた。

しかし、安倍首相は、この種子法が、民間企業の公正な競争を妨げているとの理由で、突如廃止を言い出し、国会での十分な審議も経ぬまま、昨年三月可決成立させてしまった。今後種子法廃止によって、外資を含む種子企業の参入が加速し、種子価格の高騰、品質の低下、遺伝子組み換え種子の流入による食

物の安全性への不安、長年我が国が税金による研究開発で蓄積してきた種子技術の海外流出、県を主体にすることで維持されてきた種子の多様性や生態系、生物多様性への影響など、数多くの弊害が危惧されている。

こうした懸念を受けて、「種子法廃止法案」では、付帯決議として「種苗法に基づき、主要農作物の種子の生産等について適切な基準を定め、運用する」「主要農作物種子法の廃止に伴って都道府県の取組が後退することのないよう、……引き続き地方交付税措置を確保し」「主要農作物種子が国外に流出することなく適正な価格で国内で生産されるよう努める」「消費者の多様な嗜好性、生産地の生産環境に対応した多様な種子の生産を確保すること……特定の事業者による種子の独占によって弊害が生じることがないように努める」ことなどが記されているが、どれも努力義務で法的強制力はないばかりか、早くも政府は、この付帯決議の主旨に逆行する政策を推し進めている。

特に、政府が種子法廃止の翌月に成立させた、「農業競争力強化支援法」には、「種子その他の種苗について、民間事業者が行う技術開発及び新品種の育成その他の種苗の生産及び供給を促進するとともに、独立行政法人の試験研究機関及び都道府県が有する種苗の生産に関する知見の民間事業者への提供を促進する」とあり、我が国が長年、税金による研究開発で蓄積してきた「種苗の生産に関する

知見」を民間企業に提供することが記されている上に、この「民間事業者」には国籍要件がないため、海外のグローバル種子企業に種子技術が流出し、生物特許による種の支配を通じて我が国の農業がコントロールされかねない。なかでも、世界最大のグローバル種子企業であるモンサントが販売する遺伝子組み換え（GM）種子は、発がん性など、安全性が疑問視されており、国民の健康に及ぼす被害は計り知れない。

上述の通り、安倍首相は、種子法が民間企業の公正な競争を妨げているとの理由で廃止したが、すでに政府は、平成十九年（二〇〇七年）に行われた規制改革会議・地域活性化ワーキング・グループの民間議員から、同様の指摘がなされたのに対して、「本制度が（民間による）新品種の種子開発の阻害要因になっているとは考えていない。」と答弁している。ところがその後、認識を変えたのは、規制改革推進会議の強い政治的圧力が負荷されたためである。すなわち、平成二十八年（二〇一六年）九月に行われた規制改革推進会議の農業ワーキング・グループで「民間企業も優れた品種を開発してきており、国や都道府県と民間企業が平等に競争できる環境を整備する必要がある」という提言がなされ、さらに翌十月には、「関連産業の合理化を進め、資材価格の引き下げと国際競争力の強化を図るため」、「戦略物資である種子・種苗については、

国は国家戦略・知財戦略として、民間活力を

最大限に活用した開発・供給体制を構築する。そうした体制整備に資するため、地方公共団体中心のシステムで、民間の品種開発意欲を阻害している主要農作物種子法は廃止する」として突如廃止の決定がなされたのである。

問題なのは、この種子法廃止を決定した規制改革推進会議は、単なる首相の一諮問機関に過ぎないにも関わらず、公共政策の決定に関して不当に過大な影響力を及ぼしている事である。特に同会議を構成するメンバーは、一部の大企業やグローバル資本の利益を代弁した民間議員であり、農業問題に関しては「素人」を自称しており、食糧安保や国土保全といった農業の持つ多面的機能への視点が欠落している。従来、農業問題に関しては、農水省が設置し、農業問題の専門家からなる「農政審議会」が審議したが、安倍内閣が創始した内閣人事局制度のもとで、各省が官邸に付属しているとも言われている。

さらに問題なのは、この規制改革会議による種子法廃止は、農協の解体を始めとする、安倍内閣による一連の新自由主義的な農業改革の一環であり、その背景には、アメリカ政府やグローバル企業による外圧の存在があることである。我が国における農業分野での規制改革は、アメリカがクリントン政権以降の「年次改革要望書」のなかで繰り返し要求して来たが、平成二十四年（二〇一二年）に第二次安倍内閣が発足すると、この動きは加速した。平成二十六年（二〇一四年）一月に安

倍首相がスイスのダボス会議で規制改革を国際的約束した同年五月、在日米商工会議所（A C C J）は、「J Aグループは、日本の農業を強化し、かつ日本の経済成長に資する形で組織改革を行うべき」との意見書を提出すると、それに歩調を合わせたかのように、政府は「規制改革実施計画」を閣議決定して農協改革を強行した。A C C Jはアメリカ政府と企業の代弁機関であり、彼らの狙いは、農業での規制緩和による米国企業の商機拡大と、農協が有する360兆円もの金融資産の収奪に他ならない。このような米国政府やA C C Jによる外圧は、我が国に対する内政干渉であり主権侵害である。

前述したように、安倍首相は、種子法の存在が、民間企業による公正な競争を妨げ、我が国農業の国際競争力を損なっているとしたが、現状の政府による農家への過少保護政策（例えば、農業所得に占める政府の直接支払割合（財政負担）は、我が国が15・6%に過ぎないのに対して、アメリカは26・4%であるものの、小麦は62・4%、コメは58・2%にも上る。さらにフランスは90・2%、イギリスは95・2%、スイスは94・5%にも及び、欧米に比して極端に低い）を差し置いてそのような主張をするのは全くの筋違いである。

古来、我が国は、「葦原の瑞穂の国」と称され、農業、とりわけ自国民の主食を生み出す稲作を立国の根幹に据えてきた。そのこと

は、天照大神が天孫瓊瓊杵尊の降臨に際して、皇位の御徴である三種の神器と共に、「斎庭の稲穂」を授けられ、いまも今上陛下は、毎年の新嘗祭において、新米を天照大神に捧げられ、五穀豊穡を感謝されていることにも象徴的に示されている。特に安倍首相は、平成二十四年（二〇一二年）の政権奪還時に、「ウォール街の強欲資本主義」に対して「瑞穂の国の資本主義」を掲げながら、いまでは新自由主義的な農業改革を推進し、その一環である種子法廃止は、「瑞穂の国」を破壊する売国的所業である。

以上の趣旨に基づき、安倍首相に対して以下の通り要望する。

一、安倍首相は、速やかに種子法を復活し、優良で安価な農作物の安定供給を確保すること。また、先般野党が共同提出した種子法復活法案を成立させること。

一、安倍首相は、アメリカやグローバル企業の利益を代弁した規制改革推進会議を即刻廃止すること。

一、安倍首相は、二〇一三年に生物特許を禁止したドイツの例に倣い、遺伝子組換え種子に対する生物特許を禁止すること

一、安倍首相は、家畜飼料を含む全ての遺伝子組み換え食品への表示を義務化し、意図しない混入率をE U並の0・9%（我が国は5%）未満へと厳格化すること。

残念ながら我が国では「消費者基本法」において、消費者に必要な情報が提供される権利が保障されているにもかかわらず、調味料など、組み換え遺伝子とそれによって生成したタンパク質が含まれない食品への表示義務はなく、主な原材料（重量の多い順で上位三位以内、かつ全重量の5%以上）にしか表示義務がない。また遺伝子組み換え作物の最大の用途である家畜飼料にも表示義務がない。

（代表）折本龍則 坪内隆彦 小野耕資
（賛同者） 稲村公望 加藤倫之 四宮正貴
高橋清隆 田母神俊雄 西村眞悟
原嘉陽 福永武 前澤行輝
三浦颯 三浦夏南 南出喜久治
村上利夫

内閣総理大臣 安倍晋三殿

龍光寺・染井霊園を巡り日本思想を考える

平成30年10月21日（日）

集合時間：14時（18時解散予定）

集合場所：龍光寺（東京都文京区本駒込1-5-22）

参加費：1000円（資料代として。交通費等自己負担）

龍光寺に眠る魂

山崎闇斎を祖とする崎門学派の
鵜飼鍊齋、三宅観瀾、栗山潜鋒



山崎闇斎

染井霊園に眠る魂

陸羯南



[1857～1907] 新聞人・評論家。青森の生まれ。本名、中田実。新聞「日本」を創刊し、日本主義・国民主義の立場から政治批判を展開。著『近時政論考』『原政及国際論』など。

岡倉天心



[1863～1913] 美術評論家・思想家。横浜の生まれ。本名、覚三。フェノロサに師事。東京美術学校開設に尽力し、のち校長となる。日本美術院を創立し、明治日本画家の指導者として活躍。著「東洋の理想」「日本の覚醒」「茶の本」など。

安岡正篤



[1898～1983] 国家主義者。大阪生まれ。1924年（大正13）行地社を結成、27年（昭和2）金鶏学院を創立、新官僚に影響を与える。国粋主義団体国維会に参加。第二次大戦後も政財官界首脳に信奉者がいた。

主催：崎門学研究会・大アジア研究会 (orimoto1@gmail.com, 090-1847-1627)